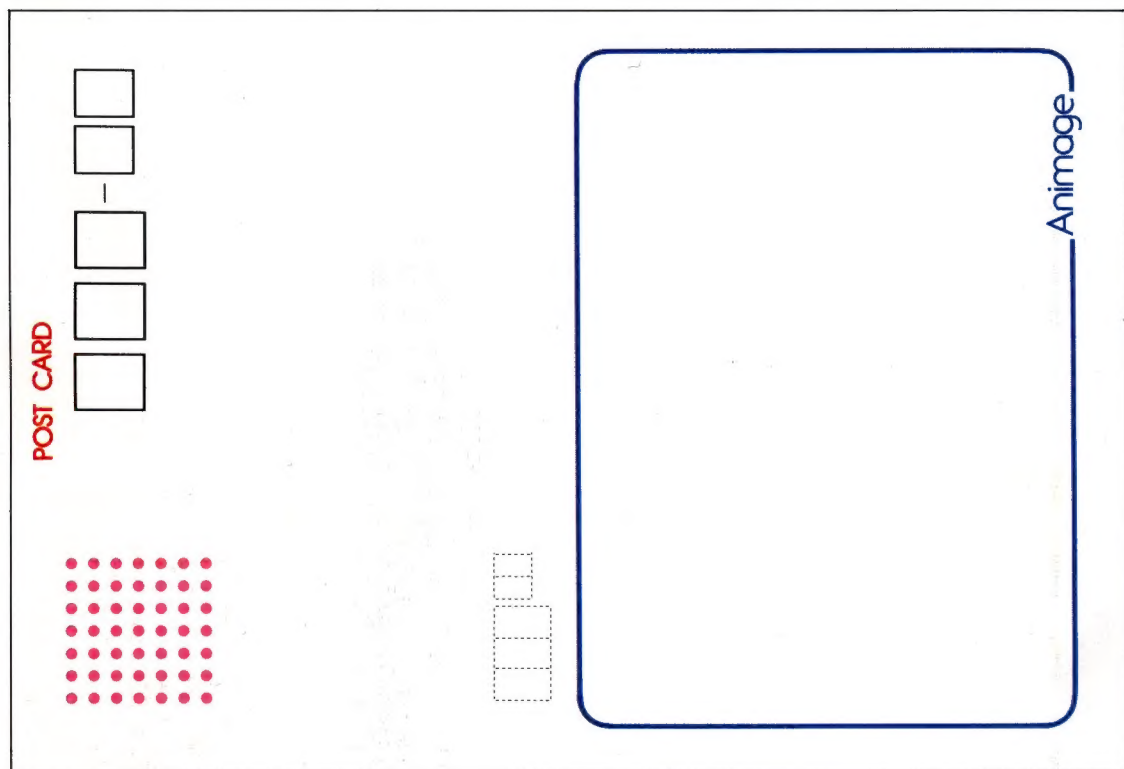
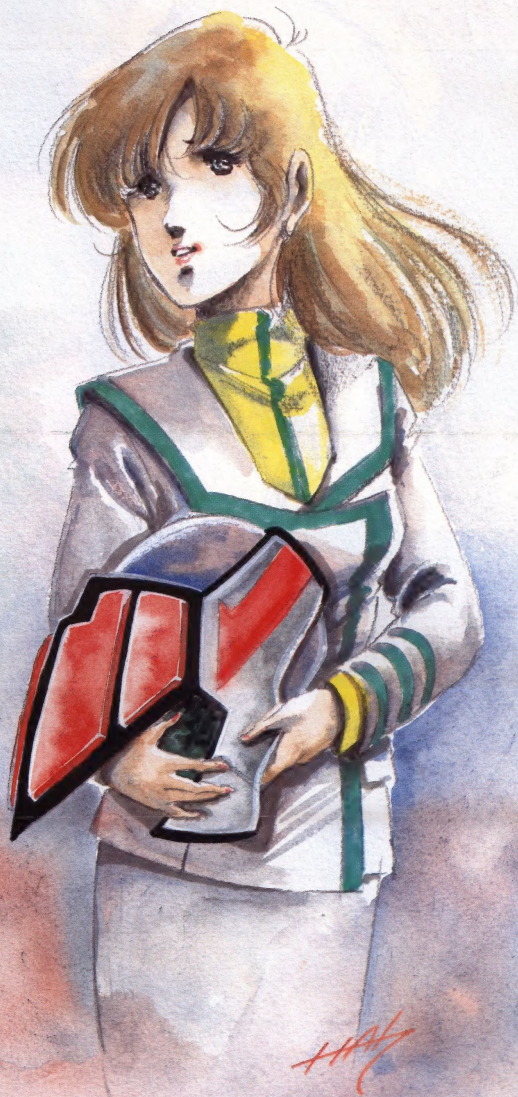
第6回アニメGPキャラクター部門第1位

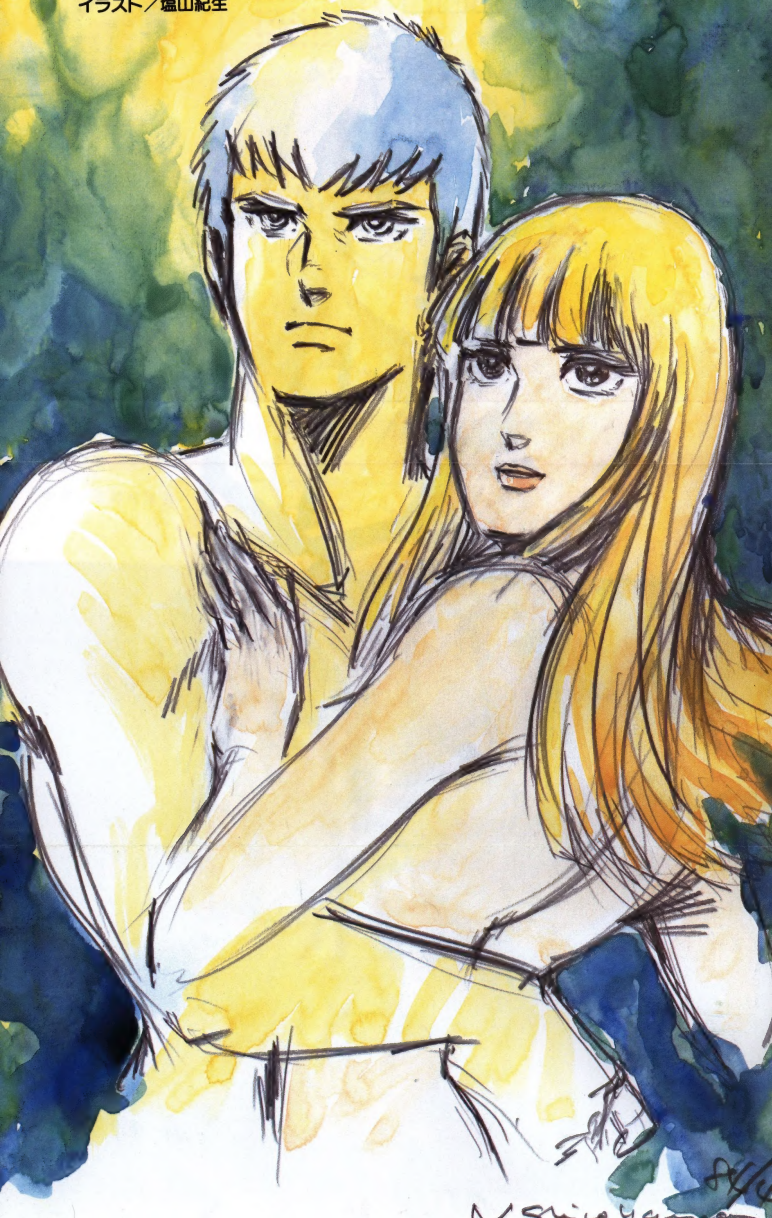
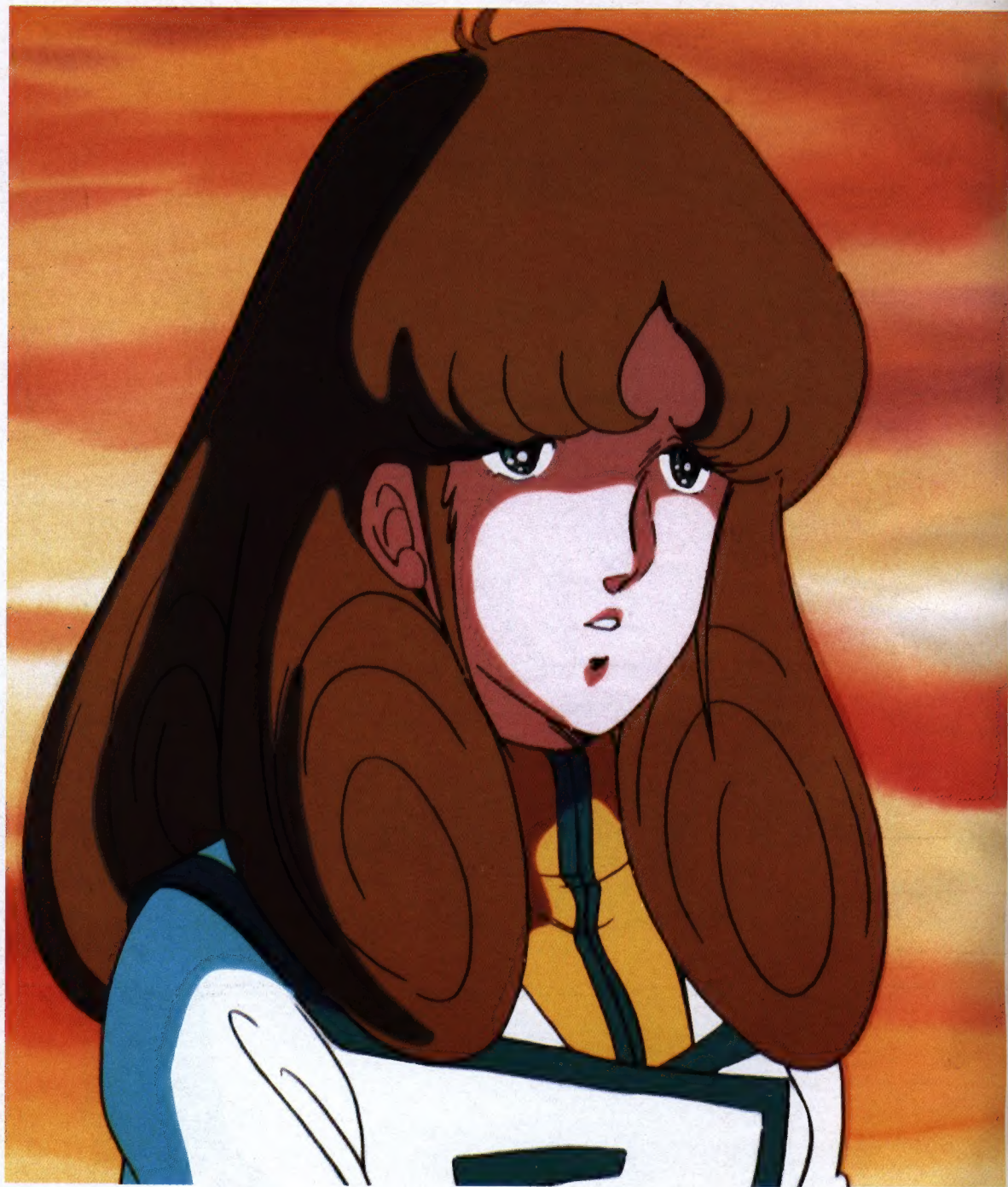
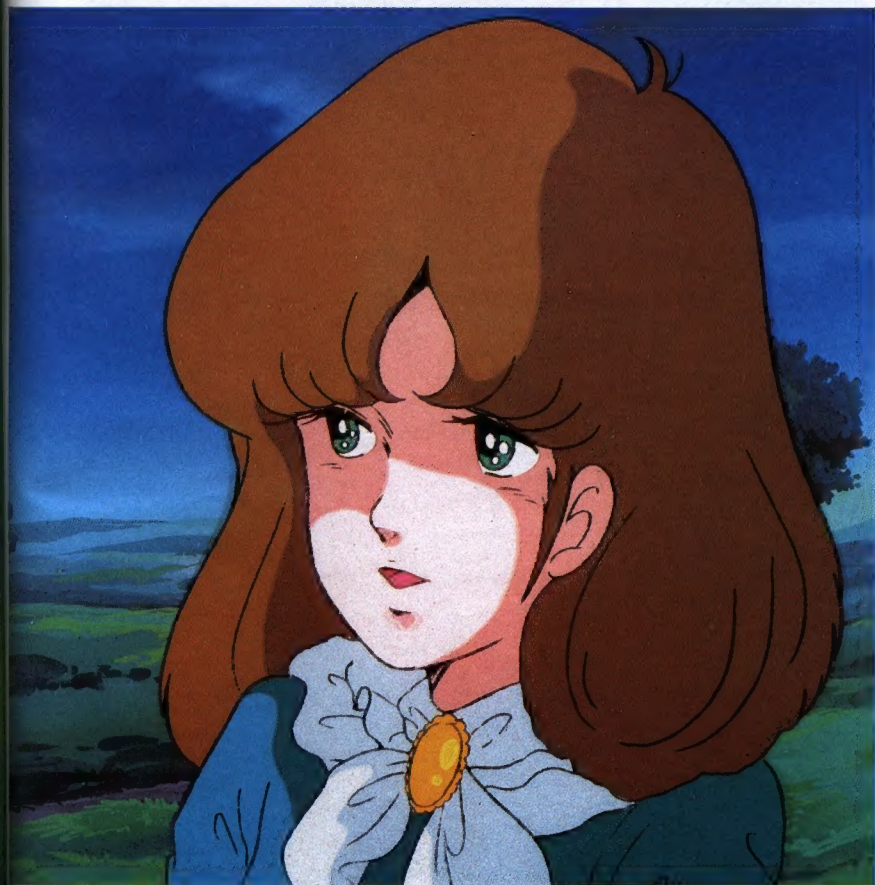
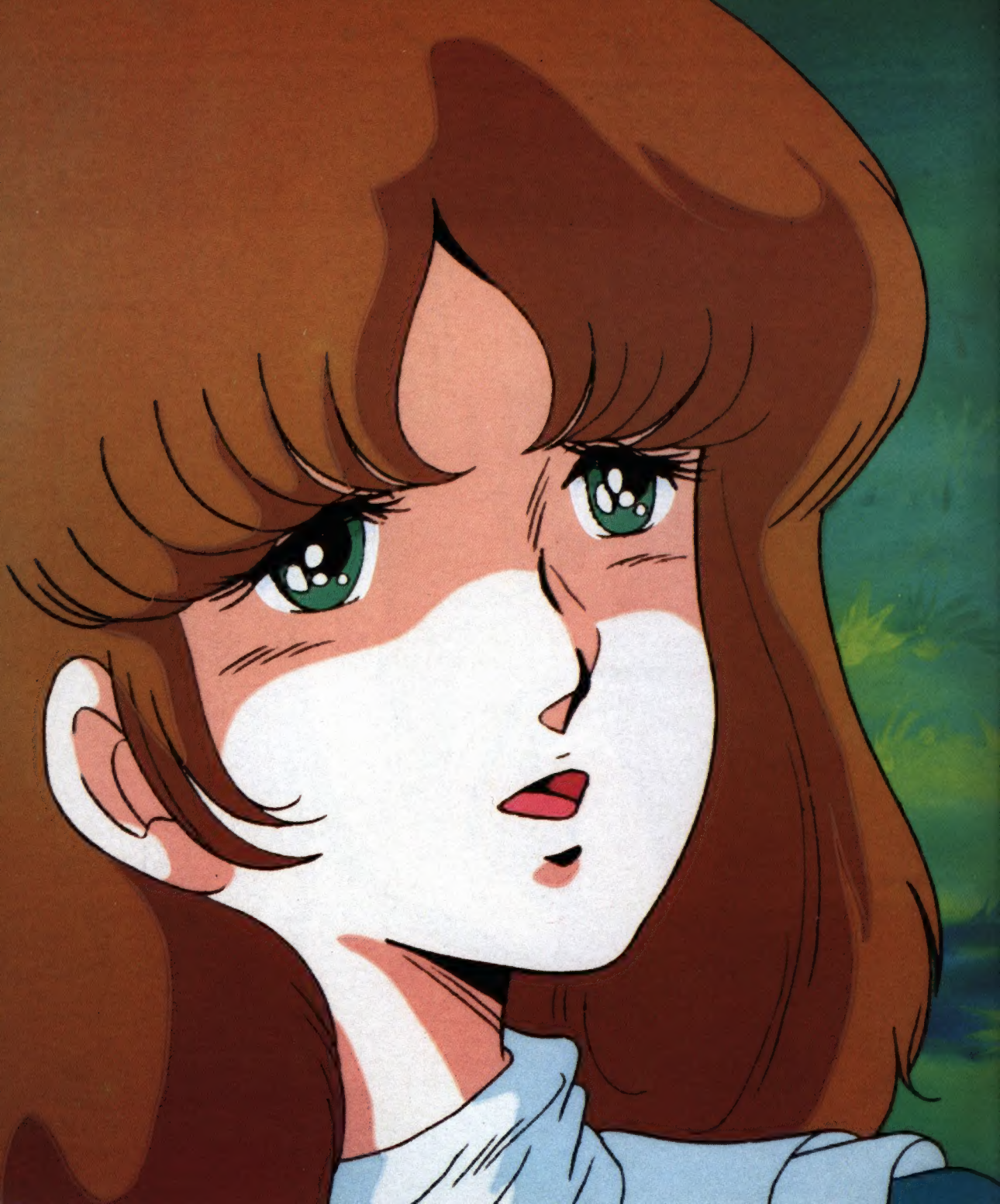
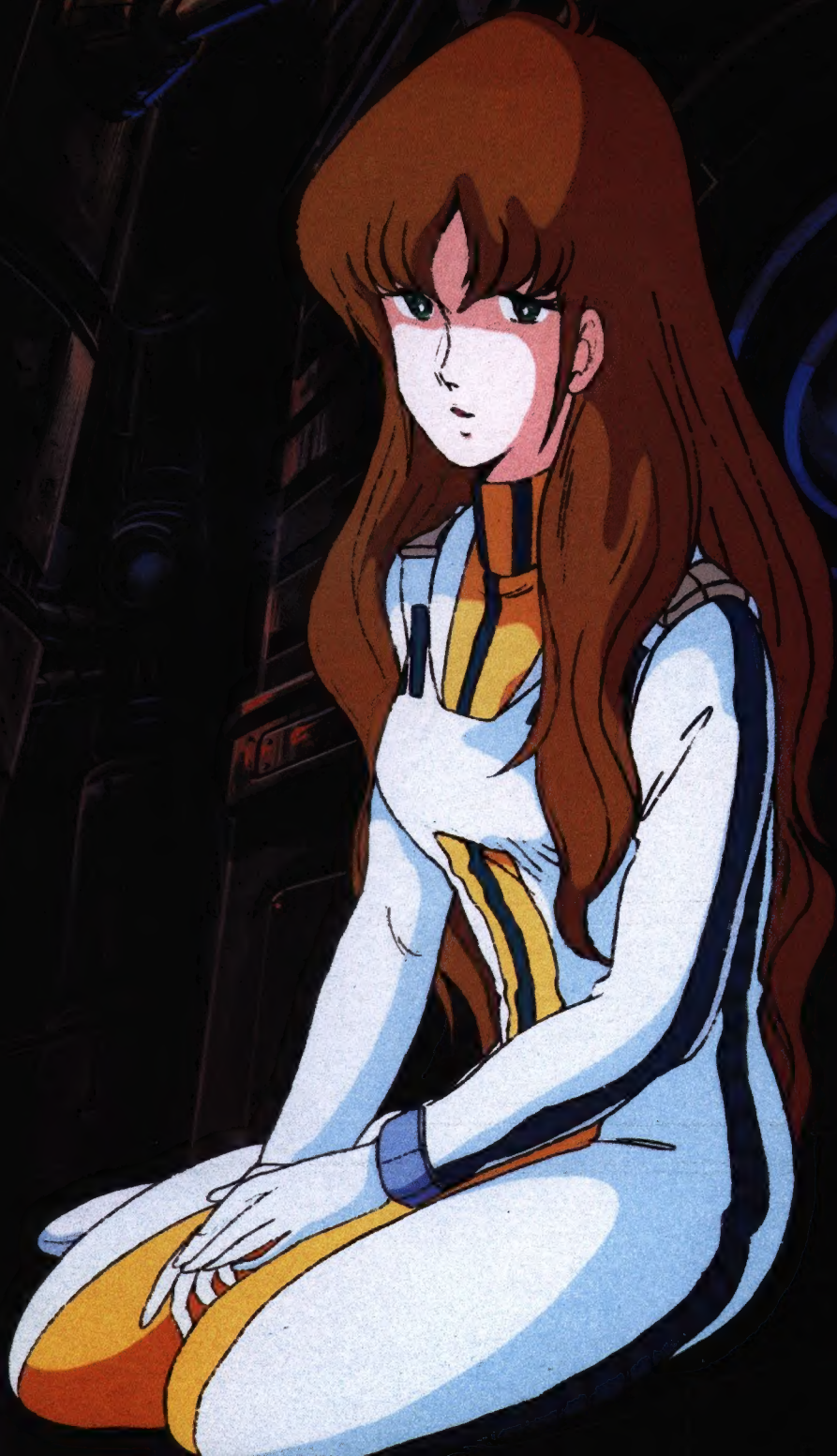
JOINT BOOK

CHIRICO

Animage '84・6月号第2ふろく

もくじ

追想

イラスト／美樹本晴彦

覚醒
イラスト／塩山紀生

未沙
メモリアル・フォト

「マクロス」って青春戦争アニメだと思うんです。

土井美加

AM　未沙がファンに支持されたのはどんなところだと思いますか。

土井　「マクロス」の舞台は、きわめて異常な状況下ですけど……未沙自身は特別な性格でもなくふつうの日本人に多い型(タイプ)ですよね。イジイジしててキラいという手紙をいただいたこともあるんですが、はっきりしたいのに、できない。という欠点も抱えた、よくも悪くも日本人である女性像が好かれたんだと思います。

AM　ミンメイとよく比較されますね。その点については?

土井　ミンメイはスターそのもの。強さや明るさがあって、太陽と月のような関係ですよね。ミンメイがまぶしすぎて(笑)ついて行けない人が未沙を支持してくれたんだと思います。ファンレターもおねえさんみたいな人といってくれる人が増えまして——男性からはお嫁さんになってほしいタイプとか。私に対するイメージも「タイムボカン」のころからずいぶん変わったみたいです。

AM　シリーズの中ですきなエピソードは。

土井　輝とのデートをすっぽかされて、カフェテリアで犬とあそぶところ(「ファンタズム」)とか、クリスマスイブに輝のところへ行ったらば、ミンメイとふたりでいるところを見てしまい、たまらずにパブに行って飲んじゃう。しかもそのとき、口をつくメロディーは「サンセット・ビーチ」だという(「ロマネスク」)こんなところがすきですね。

AM　後半のほうが印象的ということですか?

土井　というよりも、後半は未沙の女の部分が大きく扱われていて、声優としての芝居ができておもしろかったですから。前半は、ほんとにもう、仕事一筋で命令調でしょう。女しい部分を必死にこらえていた話ですから——そういう点で、「ファンタズム」なんかはやりやすかったですね。私って感情移入しないと声を入れられないんです。だから「マクロス」の仕事の日はハイヒールをはいてシャンと背すじ伸ばして「私は未沙よ」って(笑)やらないとダメ。逆にミンキーモモのおかあさんの日は運動靴はいてジーパンで「モモ!!ママですよ」ってやってたんですよ。

AM　「愛は流れる」もサブタイトル部門で受賞したんですが、この話の感想など。

土井　ファンからは、この話で終わってほしかったと——私も最終回のつもりでやりました。輝と未沙の気持ちがほんとうに通じ合ったエピソードで、ああ〝戦争青春ドラマ〟なんだなァって。ラストの、ふたりで地上に降下してくるマクロスを発見するシーン、やっていて生理的快感を覚えました。

AM　夏の劇場用作品の抱負など。

土井　全体をふり返って……というとイジイジしてふくらまないと思うので、まったくフレッシュな気分でやりたいです。青年期の役は未沙がはじめてだったので今度の受賞はうれしかった。フレッシュなころの自分をもういちど拾い出しながらやりたいと思っています。

(4月5日、東京・六本木にて)

　撮影／柏木久育

未沙ちゃんの

でんでん虫大事典!!

スタート

ア アルバム

輝の部屋をそうじ中に見たものでミンメイの写真ばかりを貼ったもの。未沙は壁のポスターを逆さに貼り直してしまう。

イ 一条くん

本編の主人公、一条輝を未沙がプライベートに呼ぶときの呼び方である。ミンメイは「輝」と呼ぶのが対照的。結婚後はなんて呼ぶのだろうか♥

ウ 宇宙服

ボディ・ラインにピッタリフィットする型で、マルスベースで未沙が着用したのが初おめみえ。ボディ・ラインがあらわに見えたためこの回を見てから未沙のファンになったものもいるとか……。

ハ ハイランダー・シティ

あ〜ん!! ミンメイさんが輝を呼び出さなければピクニックに行けたのに〜。

ヒ 秘密

ないしょ。いっちゃダメよ。など、ふたりだけのものにしておくと、とってもたのしいこと。

フ ブラジャー

ランジェリー・ショップで購入する、乳房をサポートする女性専用下着。設定書は出ていないが、某スタジオに裏設定があるとか!?

ホ 放送

マクロス艦内に戦況を知らせる。主任管制官がアナウンスするので未沙の声がおなじみになっていた。

マ マルス・ベース(火星基地)

ライバー少尉が赴任していた基地。全員帰還命令により基地閉鎖されたままの状態だったので、カムジンたちのおとり作戦に利用される。基地の自爆装置をセットした未沙が偶然見つけた部屋はライバーのものだった。

ネ 根暗

おとなしい。思い込みやすい。くよくよする……etc。能天気シャミー、明るいミンメイ、そして根暗の○○。

ヌ ぬれ髪

でんでん虫も水にぬれると弱かった。ストレートヘアの未沙もヨイ!! とファンをうならせた。

ン んもう!!

一条くんたら、なにやってるのよォあたし、結婚してあげないから♀ 輝「わかったわかったぼくが悪かったんですよ。あやまりますから」と、いうわけで、めでたく……。

ワ ワイン

未沙のすきな酒。おち込んだときによく飲む。

ロ 牢屋

ゼントラーディにとらわれたときに入れられた部屋で、輝と2度目のキスをした場所である。

レ 連絡用シャトル

統合軍本部を説得するため降下するのに乗船。援護に出た輝との宇宙空間を通しての別れのシーンは印象的であった。

ニ 二人気

はじめミンメイ、なかバチバチ。コミリア泣いて未沙勝った。アニメージュグランプリおめでとう!

ナ なりゆき

大変意味深なことばである。ふたりのなれそめ、キス、etc。すべてなりゆき……である。

ト トランス・フォーメイション

映画「小白龍」の帰りに、慣れないシャミーが急いで指令したために、輝とふたりで閉じこめられてしまったこと。閉鎖空間に男女を入れると、どうなるか(?)というコンセプトにより作られた話「ミクロ・コスモス」である。

コ コロン

未沙の愛用のものは、白地で胸元に赤のワンポイントがついている。下に着る服はピンク色のが多い。

オ おばさん

輝が未沙をディスプレイごしにはじめて見たときにいったひとこと。年上とはいえ20歳前の未沙にいうには印象的すぎる問題発言であった。

カ 河森正治

別名、黒河影次。アニメタイプカワモリと、リアルタイプカワモリなるバージョンが存在する。群衆の中でかわゆい女の子の背後に立ったり、バルキリーにビルごとふき飛ばされる得意技を持つ。

キ キス

ファーストキスは、ライバーと。ではなくて一条輝くんとしてしまったというやつである。初体験同士のキスはどんな味だったのかな。

ク クローディア・ラサール

専門技術者養成所からの無二の親友であるとともに、未沙の道標でもある。ブリッジオペレーターの中では最年長で、みんなのよき相談相手である。輝の先輩、フォッカーの恋人でもある褐色の美女。

ミ 未沙ちゃん人形

ミンメイ人形はTVシリーズ中登場したが、これはもちろん登場していない。しかし「イマイ」のフィギュアモデルがあるのだよ！♀

メ メガロード

マクロス型超ド級戦艦の2番艦SDF—2。文化をひろめる使命をおびて発進する、この艦の艦長に一条未沙が任命される。

メ 命令無視

輝の得意技。未沙のいうことを聞いてくれない。でもそれを期待しちゃうこともあるのだ。「今度もきっと来てくれると思ったわ」

モ 文句

これまた輝の得意技だ。でもやっぱり未沙はいいあいをたのしんでいるフシもあったりして。

ヤ やけ酒

輝の家に来ているミンメイを見て、失恋したと思い、バーで飲んだ酒のこと。思わず口をつく歌が「サンセット・ビーチ」というのはいかにも彼女らしい。

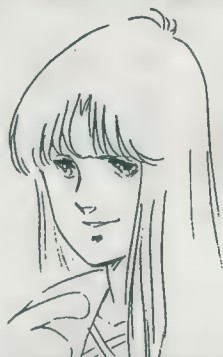
ケ 結婚

カップルの行き着く、婚約につぐ最終段階のこと。デートの待ち合わせ時間によく未沙が空想する。

コ コミリア

マックスとミリアの子ども。地球人とゼントラーディー人のあいだにはじめて生まれた子であるが、また、未沙の憧れの的でもある。

リ リン・カイフン

ミンメイの従兄。ライバーとうりふたつだったので、未沙はよろめいたが、平和主義者だったので実らぬ恋となった。

ラ ライバー

未沙の初恋の人である。軍を選んだ理由のひとつは彼を追うためだった。火星基地から帰還中死亡した。くわしいエピソードは「白い追憶」参照。

サ サンドイッチ

輝にハイキングにさそわれ、早起きして作ったお弁当。残念ながらふたりで食べることはなかった。

シ 13歳の未沙

ライバーに、ただただひたすらに憧れていたころの未沙。特徴的なでんでん虫ヘァーは、まだ未発達であどけなさが残っている。↘

テ でんでん虫

未沙の独特の髪形。うず巻きは4つあり、首をふるとのびる。どうやってあのカールを作るかは不明で、コスチュームプレイをやるファンは困ったとか⁉

タ ダイダロス・アタック

未沙が、ピンポイント・バリアーを応用して考案した必殺技。敵艦を内部から破壊するが、失敗して輝の機を落としたことがある。

ソ そうじ

婚約後、ときどき未沙が輝の部屋をかたずけること。錠はポストの中に入っていて留守のときにも入れる。

ス スナップ

輝の部屋で、ミンメイの写真ばかりのアルバムを見た未沙が、それに対抗して(⁉)輝に手渡した、自分の写った写真のこと。

↙火星基地へ赴任して行った彼を追おうと士官学校に入校しようと決心するなど、たいへんいじらしい（「白い追憶」参照）。

と・ま・ど・い
——早瀬未沙、十七歳の断章——

富田祐弘（脚本家）

夢——

私は不思議な夢の世界を漂っていた。

コバルト・ブルーの草木が一陣の風に波打つ樹林の中。私は白いオモチャのピアノを弾いていた。ピアノの音色は単純な調べ——。どこかで聞いたことのある曲。何だったのかしら。

♬赤い靴　はいてた、女の子
　異人さんに連れられて、行っちゃった

遠い昔、祖母が私を背負いながら口づさんだ歌のメロディかしら。確かなことはわからない。不確実な、不安定な、物悲しいメロディは、楽譜のオタマジャクシになって、風に吹かれて飛んで行く。嘘よ。風に吹かれて飛んで行ってしまったのは赤い靴をはいた女の子なんかじゃない。私は幾度も違う曲を弾こうとしているのに、指が私の意志に逆う。もうやめて。忘れたはず。哀しい思い出なんかに浸りたくなんかない。どうしたの未沙。今更あの人を想い出して何になるの？　もう一人の別の私が冷たくささやく。

「——激しく吹く風。波打つ草木。オモチャの白いピアノをたった独りで弾くあなた——

出来過ぎの状況だわ。赤い靴を黒い軍靴に変えて、女の子を若き軍人にすり変えれば、まぎれもない、あの人になる訳ですもの。未沙。あなたは悲劇のヒロインを演じて酔いしれているだけなのよ」

もう一人の私が私をあざ嗤う。わかっているわ。私だって、過去の出来事などにこだわって居たくはないもの。死んだ恋人は美しい。でも、現実に生きる私には関係ないこと。心の片隅からも葬り去ったはず。それなのに夢の中で、未練がましく慕っている。恋人を失くした悲しい乙女を演じている。ライバー。私はあなたの温かい眼差しが好き、滲み出る心のぬくもりが好き。

♬横浜の、波止場から　船に乗って
　異人さんに連れられて、行っちゃった

ドレミファソラ……何故？　白いオモチャのピアノはシの音が壊れている。

シ、シ、シ、シ……

私は音を出そうと鍵盤を力一杯叩く。指に汗。眉間に皺。眼はつり上がり。鏡を見れば醜い夜叉となり懸命に叩き続ける。

それでもシの音は聞こえて来ない。

夢の中では、あの人がこの世から消えたことを信じていない私……。納得しなければいけないのに——シと言う響きを……死。

誰？　笑っているのは？　私の束の間の心地良き夢想を妨げるのは誰？

ヒューヒューと吹く風の中。私が叩くピアノから飛びたつオタマジャクシが粉々に崩れ去る。嫌な奴。どうして姿を現わすの？　私は今、私一人の世界に浸っていたいのに。ライバーを失くした心の傷口をそっと撫でて、〝悲哀〟という香り高き心に酔いしれていたいのに。ガサツな人。現実だけで充分。あなたなど夢の中に現われて欲しくない。どこまで人を愚弄したら気が済むの。消えなさい。一条輝。お願い。私の前から立ち去って。これは上官の命令です。もうしばらく、私をけだるい夢の世界に漂よわさせて。

地球——太陽系——銀河系——宇宙。

その中のチッチャな私——早瀬未沙——職業、軍人——十七歳——まどろみ——遠くかすかに聞こえる目覚し時計——始まろうとしている——何かが——私の心の奥底で動き始めた——何なのだろう——昔、こんな体験をしたような気がする。遠い遠い記憶が少しずつ甦える。キューンと胸がうずく。得体の知れない、このときめきは何!?

目覚め——

私を不思議な夢の世界から呼び起こしたあいつ。一条輝。今、私を最も焦々させる奴。男のくせに優柔不断。男のくせに自分勝手。男のくせに客観的把握が出来ないダメ軍人。比較するのがおかしいけれど、何もかもがライバーとは異なる。節度がない。礼儀を知らない。職業軍人の自覚に欠ける。教えあげ

たらキリがない。やめよう。他人の悪口を言えば言う程、自分がみじめになるだけだわ。

そう思いつつ、ふとしたおりに、あいつの姿が想い浮かんでしまう。くやしい。その度(たび)に、私は焦々を募らせる。違う。絶対に。クローディアの分析ははずれています。私がうかない顔をしているのは、そんなことではありません。微笑。澄んだ瞳。フォッカー少佐を恋する美しき人。クローディア。あなたは何もかも見透かしたかのように、私を問いつめる。あなたはこだわっていると。

「未沙。おバカさんね。気位なんか捨てちゃいなさい。何をためらっているの? 坊やよりも年上だから? それとも上官だから? 男と女の恋に、目上も目下もないわ。胸をかきむしる熱い思いがあれば、それで充分」

クローディア。勘違いしないで。私があなたに一条輝の話をしてしまうのは、彼に興味があるからではないのです。むしろ逆。私は彼を私から遠去けたい。彼は職業を誤っています。彼は軍人に向くタイプではありません。バルキリーの操縦が好きなことと、職業軍人になることは別問題。それを同じことだと錯覚している彼は不幸です。だいいち軍に入る動機が不純です。軍に入ればいつもバルキリーに乗れるとか。自分の手で歌手のミンメイさんを守ってみせるとか、自己顕示もはなはだしい。軍は個人の為に存在するのではありません。あくまでもみんなを守る為に——。

嫌ね。またこんな話。軍人の家庭に生まれ育った私の癖。軍人の望ましい姿とは。軍人としての取るべき態度とは。いつもこれ——。

他人が見たら嫌味な女に映るでしょうね。

♬キューンキューン〳〵
　私の彼は、パイロット

ミンメイさんの歌声が聞こえる。こぼれる笑顔。あどけない身振り、汚(けが)れを知らない歌。

情熱的なあなたの燃えるようなハート。私は少し、妬ましくさえ思う。

嫉妬——

ジエラシーは魂の黄昏(たそがれ)。一瞬にしてメラメラと燃え上がる嫉妬心は、初秋の夕焼けに似ている。すぐに燃えつきて、山の端に沈み、夜を迎える前ぶれとなるだけ。後は闇。ジエラシーは新たな展望を何も生みはしない。ただひたすら身と心をすり減らすだけ。心の闇を迎える準備をするにすぎない魂の黄昏。不毛(ふもう)だとわかっているはずなのに、人の多くはあらゆることに嫉妬する。私も——。

リン・ミンメイさんの野放図さ。天真爛漫さ。積極性がうらやましい。言いたいことがあれば、素直になんでも口に出せばいいのに、出来ない私。それを私は、女の子のひかえめなお行儀の良さだと自分に言いきかせて誤魔化している。だから私は彼女の大胆な行動に憧がれる。でも、憧れの対象は何?

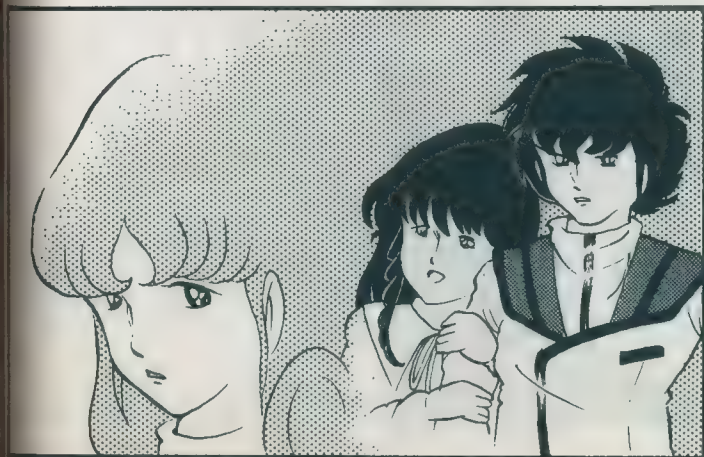
イラスト/くあTERO

ミンメイさんの素晴しき歌手としての才能？　ノン。ミンメイさんの屈託のない笑顔？　ノン。ミンメイさんの……。
違う。嫉妬している原因はただ一ツ。
〃ミンメイサントイチジョウヒカルガ、コウサイ、シテイルコト〃
私には関係のないことのはずなのに。いつもぶっきらぼうな一条輝。デリカシーがなく、上司を尊敬する態度も持たない不遜な奴。
あいつが誰と交際しようと興味はないはず。勝手にしなさい。好きにすればいいんだわ。いつものように。私の思いなど無視すればいい。あの時のように。

喧嘩――

あの時、超時空要塞マクロスはトランス・フォーメーション体制を取っていた。ダイダロス・アタックを敵艦に仕掛ける為に、バルキリー隊は編隊を整えて、敵をポイルトRX・作戦コードナンバー12空域に誘導すべく、飛翔していた。それなのに一機だけ、編隊を崩すパイロット。一条輝がいた。
「何をしているの？　私の指示に従いなさい！」
「敵が一機、隠れているのが見えたんだ。そいつを叩く」
「勝手な真似をしないで、敵機を確認したのなら報告だけすればいいことよ。事後処理はこちらでします」
「そんな余裕はないんだよ。作戦が失敗してもいいのか！」
あいつは興奮気味にそう叫んで、私の指示を無視して飛んだ。あいつは危険に瀕し、辛くも隠れていた敵機を撃墜。結果的に作戦は成功した。でも、もし後続部隊の援後射撃がなければ、あいつは死んでいたかもしれない。
そんなことは全く感知しないかのように、あいつはシャアシャアと私に文句を言う。
「あなたは何故、軍人の眼でしか物を見られないんですか？　女の子なら、たまには女の子らしくふるまうことがあったっていいはずです。あなたは割れたガラスの破片です。冷たく堅く尖っている。真綿みたいに優しく、ふっくらと包み込んでくれる気持ちがまるでない。バルキリーに乗るパイロットは、みんな懸命なんです。一瞬一瞬の死におびえながら操縦しているんです。せめて、指示を出す時ぐらい、心のこもった優しい声で、やって欲しいですね」
アホか。深夜の魅惑のディスクジョッキーじゃあるまいし、戦闘指示を甘ったるい描なで声でやっていられるか！　カチンときて、私はそう叫ぶ。
また、喧嘩をしてしまった。今日こそ、よそうと思っていたのに。どうして、こうなってしまうんだろう。あいつがいけないのよ。
〃女の子なら、たまには女の子らしくふるまえ〃ですって。
失礼だわ。私だって女の子よ。お化粧もすれば、オシャレだってする。独りになれば、鏡をじっと見て過ごすこともある。額の上にポツリとニキビが出来れば、一日中気になってうっとおしくもなるし、眠りが足りなくて、まぶたが腫れぼったい時は気が滅いる。自分でも決して美人だなんて思わないけど。今日の私は、私なりに綺麗かしらって、心配にもなるし、心をときめかす朝だってある。
そして、無性に人恋しい時は、鏡の前にジッと坐り込んで、あの人のことを思い出す。
その私の束の間の楽しみを壊すのはあいつ。

一条輝――

土足で私の夢の中にズカズカと入り込む。
突然の電話。リリリーン。
「ボク一条輝です。悪いけど、ティーパック、ありますか？」
「えッ？　ティーパック？」
「インスタントの紅茶パックですよ。急に紅茶が飲みたくなっちゃって、食器棚開けたら一個残ってたんだけど、ハハハッ。ネズミに噛じられちゃってた。フォッカー先輩や、柿崎やマックスに電話して、もらおうと思ったんだけど、そんなものあるか！　ガチャン！　って電話切られちゃったさ」
「あたり前よ。今、夜中の何時だと思ってるの？」
「分かってる。悪いとは思ってるけどさ。紅茶、飲みたくて仕方無いんだ。おすそ分けしてくれないか」
「あなたお酒飲んで酔ってるの？」

「酔ってなんかいませんよ。フォッカー先輩と食事一緒にしてワインをちょっと飲んだだけ」

「ちょっと？　どのくらい？」

「赤、白、ロゼ、合わてててボトル二本半」

「呆れた人ね」

「あれッ。早瀬先輩、声が少し沈んでますね。何か悲しいことでもあったんですか？」

「真夜中に叩き起されて、ルンルン気分で応答する人がいると思って？」

「あッ、そうですよね。先輩みたいな人が滅多なことで落ち込む訳ないですもんね。何もなくって良かった」

いつもこんな調子。全く、常識ってものがないんだから。でも、考えようによっては、こんなガサツな相手だから、私の方でも、何も気兼ねしないで好き放題言えることも確か。心を解放して、思いついた儘を話せる相手。一人位、こんな奴と付き合ってみるのもいいかもしれない。私は今は、喫茶室で、体を寄せ合って、甘くささやき合う恋人など必要ない。

例えば、軍の仕事がメチャクチャに忙しくて、クタクタに疲れた夕暮。

例えば、失敗をして、グローバル艦長に厳しく叱られて、ついギスギスとした心を引きずってしまった夕暮。

「大変だったね」

なんてなぐさめてくれたり、甘くキスしてくれる恋人などいらない。そうされたら、却って自分の愚かさがつらくなるだけ。

それよりも、ブルーな気分が募った時、何のこだわりもなく、とりとめのない話に花を咲かせてくれる相手の方がいい。

私のメランコリックな気持ちを突き放すようにけなしてくれる相手の方がいい。

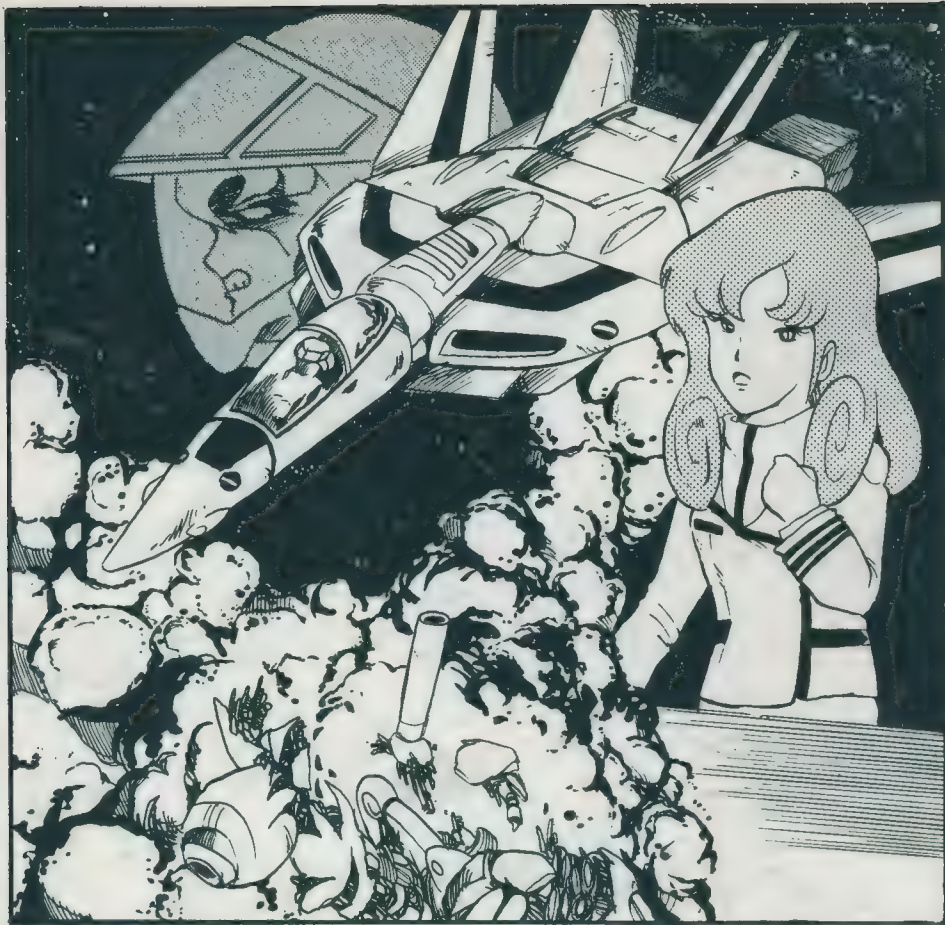
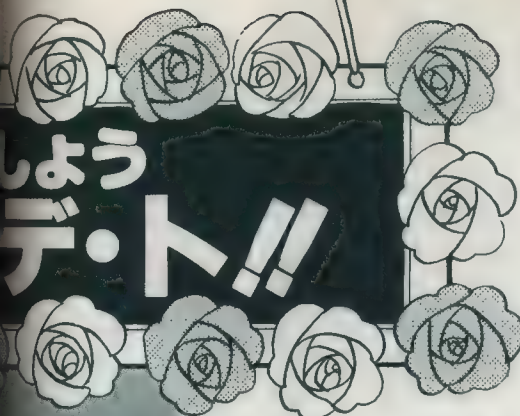
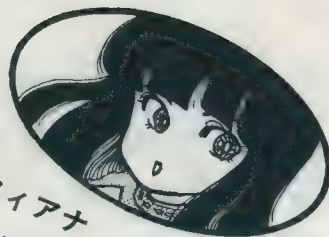
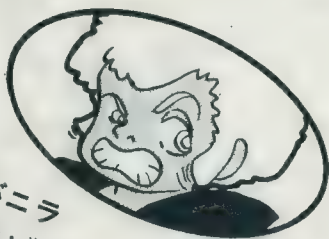
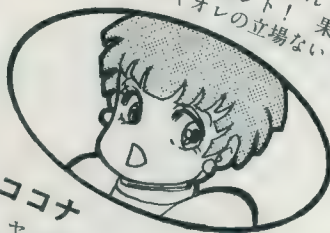
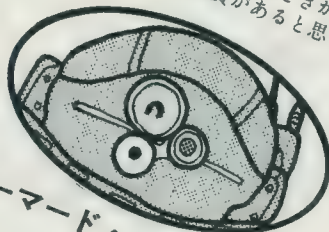
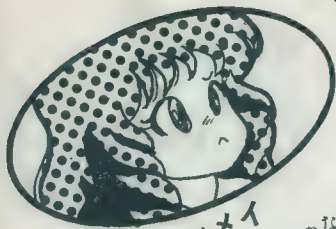
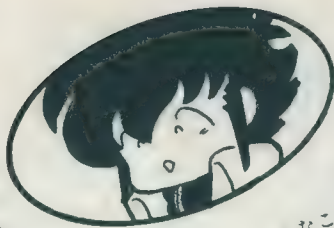
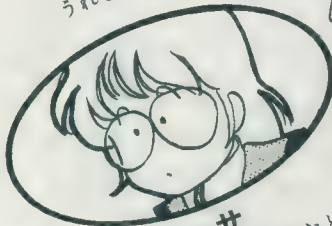
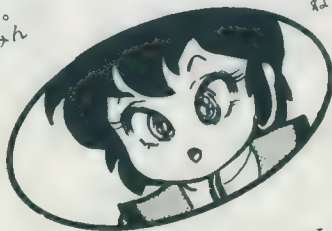
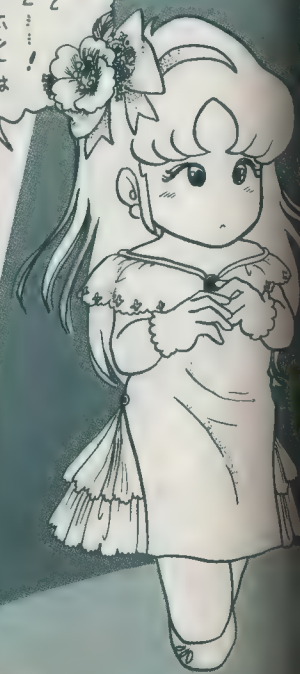
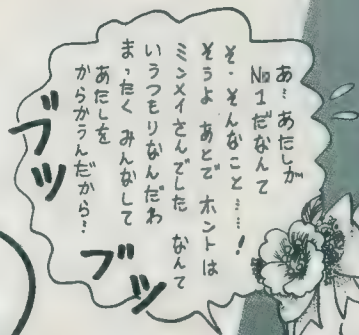
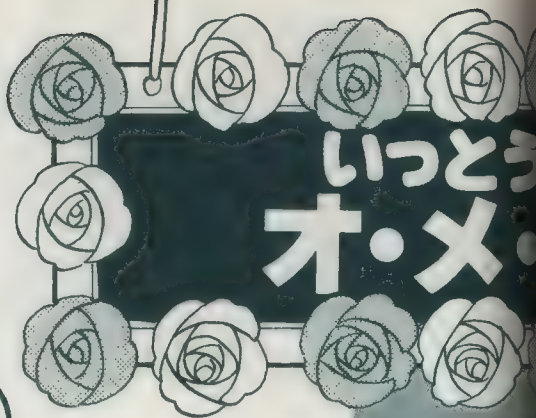
「先輩みたいな人が滅多なことで落ち込む訳ないですよね」

あいつって、私の今日の心を知っていながら、わざとデリカシーのないような口をきく。

初めはガサツな奴だと思っていたけど——。

もしかしたらあいつなりの精一杯のなぐさめのつもりなのかしら？　紅茶が飲みたいなんて、シラジラしい言い訳を作って、電話をくれた。もしかしたら、あいつも、今日一日私と同じように、メランコリックな気持ちでいたのかもしれない。

とりあえず、あいつの所に、ティーパックを二ツ持って行ってみますか——。

これからのしばらくの時間は、立ち止まって眼を閉じて、夢を見ることはせず、ドアを開けて、一歩、外に飛び出してみますか——。

しょう
デ・ト!!
さて、ここで第6回アニメグランプリのキャラクター部門で堂々1位に輝いたおふたりに、関係者のみなさんからお祝いのことばが届いておりますのでご紹介いたします。
イプシロン
わたしはいま、はじめて知った。キリコ、おまえは……いっとうしょうを取ったのだな。
フィアナ
……キリコ…………オメデトウ……。
ル・シャッコ
いっとうしょう? なんだそれは、クエント人はそんなものは知らない。
バニラ
キ・リ・コちゃん♡ このお、にくいよホント! 果報者!! まったくオレの立場ないじゃない!
ゴウト
ヤッタなキリコ。オレははじめて会ったときから、おまえには素質があると思ってたんだ。
ココナ
ヤッタネ、キリコ♡ もう最高じゃん♡ キリコ、バンザーイ!
アーマード・トルーパー
Pi……PiPi…Pi (オ・メ・デ・ト・ウ・キ・リ・コ)。
神にならないで一等賞になってしまった

イラスト／ただのかすみ
インタビュアー／まちだともゆき

ワイズマン
――彼は何故キリコを選びしか――

五武冬史（脚本家）

意識体としてのワイズマンの思念は、明確にヘルの湿源の全貌を補足していた。汚濁と腐食と悪臭に満ち満ちたこの湿源は、永遠の時を泥沼の中に封じこめたまま、二千年の昔と変わらぬ姿で宇宙を吹き渡る電磁風に耳をそばだてていた。

原形質保存装置の電子の粒子が運び来る情報は満ち足りたものであった。すべてが順調に運んでいた。至福の時はもうすぐである。

間もなくこの湿原は狂気と破壊の祝福を受けるはずだ。鉄の装甲は大気を貫ぬく熱線と銃撃に切り裂けて溶解する。兵士の肉体も血と共に飛散していく。無窮の時に思惟を漂わせてきたワイズマンにとって、この瞬間こそ自らの精気と光彩が膨張する時であることを認識していた。特に今日、無辺の宇宙の祭壇に奉献しようとする生贄はATM―09―WR――マーシィドッグ、二十機だった。生きる死臭がたちのぼるこの機体に踏みしだかれた死体がどのくらいになるのかワイズマンも知り得ない。

生への執着をからみつかせた白骨が宇宙塵のきらめく夜にマーシィドッグの足底で砕かれたこともある。乳呑児を抱いた若い女が専用銃から迸るエネルギーに消滅したこともある。一言の言葉の許に記憶だけの存在になった集落もある。

しかし、彼等にとっては、怨恚も憎悪も悪罵も哀願も哀訴も宇宙を吹きぬける電磁風と等質のものでしかなかった。殺人鬼、人殺し、殺戮者と彼等を賞讃するそれらの言葉も意味のないものになっていた。言葉は、自らが持つ力を消失して大気のない暗黒の世界に浮遊しているだけだった。彼等だけが貪欲なまでに前進して黙々と死体の山を構築していった。

――レッド・ショルダー。

世間は、命のはかなさと引きかえにこの殺人者の集団名を記憶していった。だが、彼等こそ永遠の栄光を担う者たちにちがいないと、ワイズマンの思念は、彼等の存在を許し、さらにある種の期待を抱いていた。栄光は彼等のものだと思っていた。しかし、その栄光に浸らせる為には、相応の試練が伴う。宇宙の摂理を越えて君臨するには、流星の軌跡を追うだけでは叶うはずがない。アストラギュウス銀河の運行を手中に収めることが出来る者は、特異な、それこそ特異な、逆に言えば超越する資質を有する者でなければならないと思っていた。

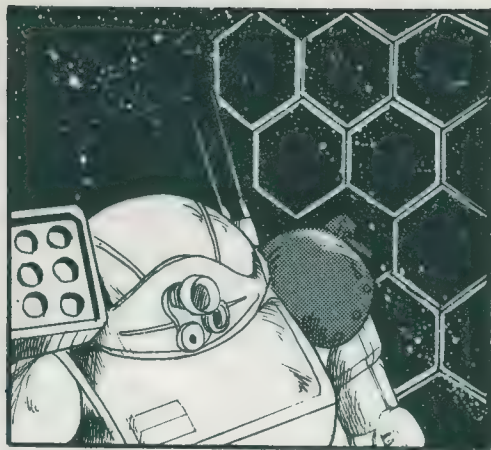
それがこれからわかる。

彼等は、バラントのAT百機とここで遭遇することになっている。百対二十。五倍の敵である。一機で五機を相手にする。絶対的に不利だと思う。敗北が必至かもしれない。

それならそれでいい。また新たに資格を有する者たちを探しだすまでだ。ワイズマンの思念は、思惟の一点に自己を凝固させて判断を下した。今、期待を持って見ている二十機のATが鉄の形骸と化したところで取り立てるほどのことはないと思っていた。彼等が電磁風と等質である限り、二千機でも二万機でもそれは同じだった。故にワイズマンは、彼等の存在を許し、期待もしているのだった。

厖大で果てしなく時がたゆとう宇宙では、生と死など塵ひとつほどの重みもない。現在も死があり現在も生があった。膨張した二つの恒星が赤色の光輝を宙に放ち、従えていた七つの惑星と共に崩壊していった。放射線は彼等の断末魔の悲鳴を運んだか。運びはしない。電磁波は彼等の苦痛を伝えたか。伝えはしない。赤色の光輝にわかるかわからないくらいの色彩りをそえて消滅していった。それが彼等の存在証明だった。これが自然界における絶体的宇宙の法則である。

なのに奴等は、何故騒ぐ。平和、友好、愛、希望、戦いを忌み嫌いながら自らを戦いに駆り立てる愚かな者ども。奈落の底を見ながら奈落の底へ落ちていく愚かな者ども。闇の中でさらに闇を紡ぎ、混迷は叡知の母であるはずなのに、迷宮の旅人としかなり得ぬ愚民たち。

イラスト／くあTERO

ワイズマンの思念は〝倦い〟ていた。自己の肉体が消滅してから二千年。惑星クエントの地中深く原形質保存装置に同一化して以来、初めて思惟の表層に浮かび出てきた意識だった。認識した時、保存装置の粒子の流れに軽い異変が生じた。自己の意識は完全に客体化され固定化されたはずなのに〝人〟の時代の意識を同質のものが深部から浮上してくるとは……。少なからず衝撃を受けた。それで粒子の流れに変化が生じたものにまちがいない。三千年という時間の中で数量化され蓄積されたアストラギュウス銀河の凄まじいばかりの情報量が思念に変化を与えたのかもしれない。クエントの文明が飽和点に達した頂点において異能者という超越者を生みだしたように。満ち溢れた情報量はワイズマンに力を与え自在にそれをふるえるようにした。これが〝倦む〟遠因となっていったようだ。

当初、力を手に入れたワイズマンは、思念が命ずるまま、面白いようにアストラギュウス銀河を操作した。

愚かな者たちにひと時の安息を与えると、掌を返すように、血潮で鼓舞した者たちを送りこんで死と恐怖と破壊を叩きつけてやった。権力という餌も混濁を招くためには恰好の道具であることも知った。どれほどの最高行政官がその地位の象徴である黄金の胸飾りを撃ち抜かれて反乱軍の足下に死体となったことか。流星塵で夜空が色彩られるたびに、自分の地位がおびやかされる前兆とおびえた司令官もいた。

人の心を弄ぶほどたやすいことはないとわかったのもこの時である。暗黒世界の神秘に茫漠たる思いをはせていた時でも人心だけは掌中のものとして転がした。

二千年の歴史の中で幾万の国家が星雲のきらめきの中に産声をあげ、潰滅していったことか。民族も同じだった。ワイズマンが仕掛けた罠とも知らず新天地を求めて移動の最中に艦隊もろとも星屑となったものたちもいる。種族もしかり。興隆と滅亡のサイクルの中で、愚かな者たちは、苛酷な運命を呪い喘ぎの中で救世主の出現を待った。当の救世主に痛めつけられているとも知らずにである。だから当然、彼等の願い通りの救世主は出現しなかった。それほどに彼等は三千年このかた哀れで愚かで、誰一人としてワイズマンの存在に気付いたものはいなかった。

また、ワイズマンは花を萎らすことも出来た。本能を鋭敏に研ぎ澄ました野獣をすくみあがらせることも出来た。

しかし、やってみてくだらないという結論を出した。神の仕事ではないと思ったからだ。神の仕事は自ら罪業を行えることにあるのだと、この時はっきり自覚した。恥ずかしいがそれまでは、自らを神の代理人として認識していたが、神が何かを知らなかった。奥手の神である。この時からワイズマンは自らを神と認知とした。

そして、ここから〝倦む〟ことが始まった。完璧で厖大な情報量にもとずく完全な支配――代理人と認識していた時は、概念に間隙があった。遊ぶ余裕があった。思念を銀河の果てまで駈け巡らせることが出来た。しかし自らを神と認知することによって完全無欠になってしまった。自らが宇宙そのものになってしまった。幾千億の恒星の輝きもそれを包みこむ暗黒も、ワイズマンにとっては、原形質保存装置の色褪せたランプに過ぎなくなってしまった。

アストラギュウス銀河は、ワイズマンの機構に過ぎなくなってしまった。どちらでもいいと思った。存在しようが消滅しようが……。少なくとも少し前までは、嘲笑の対象物であったはずだが……。ワイズマンは自己の思念から急速に活力が衰退していくのを感じていた。

戦争を勃発させなければ……怠惰に陥りそうな思惟に覚醒を与えなければ……完全無欠というのは疲れる。彗星が青白い尾を引いてクエントを掠めた時、ワイズマンは決意した。銀河を見渡せば火種は幾つでも転がっている。ギルガメス星系とバララント星系をぶつけるのもいい。二つの星系に徹底した破壊と殺戮をさせてみるか……百年ぐらい。

人は、その戦いを「百年戦争」と呼称した。滅亡した国家三百二十、消滅した種族三十、消失艦隊二万六千隻……あげればきりがない……ワイズマンの思考は、数量を追うのを中止した。連日の如くギルガメスとバララントの宇宙が、血の祝福を受けている。それだけ知れば、ワイズマンは満足だった。ひとつひとつの戦果に思念を傾けるより、さらに興味を引く対象物が電子装置の粒子の中に俎上し、間断のない刺激を与えはじめていたからだっ

た。

見えざる電子の流れがワイズマンのファイルの中から、一人、二人、三人……と、特定の兵士をピックアップしはじめていた。

素性はよく判らなかったが、優秀な屠殺者であることはまちがいなかった。ドミノを勝ち上ってきた勝者のように自然とワイズマンの機構の中で浮上してきたのである。

底知れぬ闘争心と忍耐力で敵を凌駕して、いかなる戦線でも勝者になった。勝者になれぬ時は、生存者となった。大胆な意志は、自己の感情さえ抹殺し精神に起伏を与えなかった。そのうえ、機械と同調することによって常に最後の賭である戦闘に勝ちつづけてきた。

それは奇跡に近いことだった。

彼等は何者なのだ……ワイズマンの思念は、初めて男を見染めた乙女のように震えた。

自分が求めていた男たちなのか。私と同じ異能者たちなのか……。

ワイズマンの思念は、時空を越えて三千年昔の自分に思いをはせた。まだ肉体が健全で赤い血が毛細血管の隅々まで駈けめぐっていた頃である。

その頃、他者と同一歩調で歩みながら何時の間にか先頭に立っている自分に何回となく気付いていた。他者が星空を仰ぐ時は雲があり、ワイズマンが仰ぐ時は、さえざえとした月の光があった。他者が権力の階段から転落した時、ワイズマンは昇りつめ為政者の一人となっていた。何かが他者とちがっていた。何かが無意識のうちに肉体を蠢動させていた。それが異能の才であることに気付いたのはずっと後のことである。

ワイズマンの機構は、彼等がひとつの部隊に集結するようにひそかに策をほどこした。

銀河の辺境から、激戦の宇宙空域から、あるいは、血みどろの前線から、無表情な兵士たちがレッド・ショルダーの補充要員として配属されてきた。

目には何の光も持たぬ兵士たちだった。未来を見つめることもなく、過去を振り返ることもなかった。希望がないかわりに絶望もなかった。生への執着がないから愛もなかった。

生者の悲鳴にも死者の嘆きにも、彼等は耳をかたむけなかった。一片の感傷もなく彼等は敵と呼ばれる者の生命を断つことが出来た。個でありながら、そこにはすでに宇宙があるとワイズマンは満足した。

レッド・ショルダーの戦果が飛躍的に上昇したのは当然の成果であった。

ワイズマンの思念は原形質保存装置の中で次の段階へのステップを彼等に踏ませる必要を感じた。

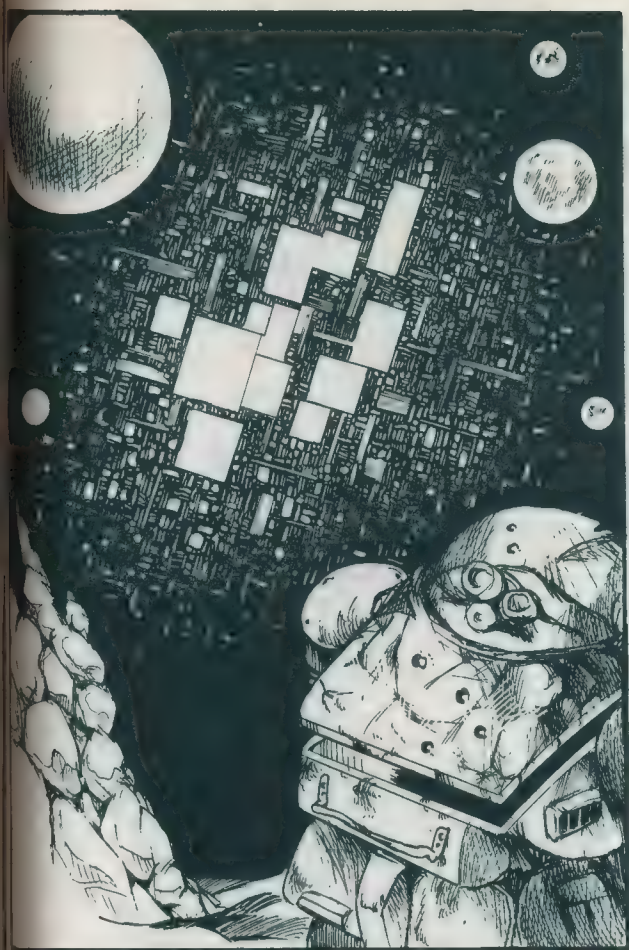
真の意味で異能者であるかどうか、最終段階の調査だった。

異能者としての結果が出た場合、ワイズマンは己れがとるべき態度を決めていた。

自らの後継者としての道を歩ませることであった。

神が永遠に神であるためには、全能をかたむけて司どる祭司者がいなければならない。

神が異能者であるからは、祭司者もまた異能者であることが望ましい。宇宙の子として神と同調出来るからである。罪業を雄々しく行使出来る者でなければならない。超越者として雄々しくである。雄々しくあれば他者はぬかずくしかなくなる。

その最適任の異能者を選ぶ儀式が、このヘルの湿原の戦闘だと、ワイズマンはそう思っていた。

いよいよヘルの湿源により抜きのマーシィドッグ二十機が頭へ現われた。道は湿源の中に一本、細いのが続いているだけであった。渡り切るには、突き進むしかない。道を踏みはずせば、たちどころに三千年昔と変らぬ泥の中に呑みこまれ永遠の時に抱えこまれてしまう。

細い道が湿原の中ほどへ差しかかると、大きなブッシュが二ヶ所、飛び石のようにあった。

ワイズマンは、バララントの百機のATを五十機ずつに分けて、二つのブッシュの中に待機せさせた。ブッシュにはそれくらいのゆとりはあった。

二十機が一つのブッシュを通過して、二つ目のブッシュに近づいた時、狭撃する手はずになっていた。どの角度から見ても二十機に勝算などありえないようになっていた。

だが……と、ワイズマンの思念はためらう事なく、用意してある結論を思い浮かべた。

彼等は異能者たちかもしれないのだ。圧倒的不利から勝ち残ってきた者たちばかりなのだ。今度もまた誰が残るはずだ……。

選り抜きの屠殺者を搭乗させた二十機のマーシィドッグは、細い道に鉄の機械音を響かせてひたすら前進して行った。常に変らぬ行動を見せて——。

ところが二十機は、第一のブッシュに接近するや、一斉に先制攻撃を開始した。手はずを見事に読みとられてしまった。

いつもながら動きに無駄がない。ブッシュ側の反撃で三機がふっ飛ばされた。七トン近い鉄の塊りは泥沼の好餌となって底なしの胃袋へおさめられていった。

その間に残りの十七機は、五十機の敵が待つブッシュの中へ、罠に落ちるにしては、かなり荒っぽく突入していった。

迎え撃った五十機のATから生気が迸り出た。

〝奴等を八ツ裂きにしろ〟〝腹わたをつかみ出してやれ〟

十六ミリの鉄板を通り抜けて、マーシィドッグにぶつけられていった。

馬鹿な奴等だ。ワイズマンの思念は五十機に苦笑し、数だけ揃えた己れを嘲笑した。これでは勝てぬと思った。人のくささが装甲越しに判るようでは、十七機の敵ではないとわかった。

事実、その通りになった。機先を制してブッシュを攻撃したように、十七機のレッド・ショルダーの動きは、五十機の行動を読み、本能的に先手先手と攻撃を仕掛け、的確に昂ぶることなく相手を破壊していった。

それでもレッド・ショルダーは七機を失って役目を終えた。

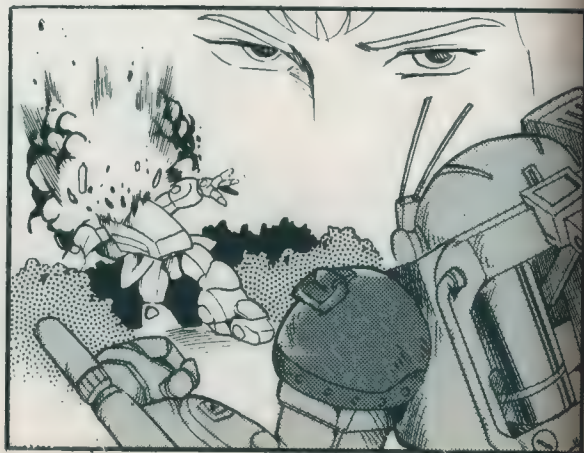
第二のブッシュでの戦闘の詳細はワイズマンは黙殺することにした。

第一の戦闘で敵の本性と味方の本性の特質と差異が見極められてしまったからには、戦闘記録を電子装置に記憶させることは無駄なことだと思ったからだ。

勝敗だけを記憶させた。十機のレッド・ショルダーのまたもや圧倒的な勝利であった。五十機の敵をわずか十機で泥沼の餌にしてしまった。

この事実を知った人間共は何と言うだろうか……ワイズマンは、一瞬間だけその言葉を求めて思考を遊ばせた。

しかし、すぐにまた仕事にとりかかった。作戦としては満足出来ないものであったがそれでも当初の目的通りの収穫をあげることが出来た。

二十機のレッド・ショルダーの中で、すぐれて予想以上の動きを見せる一機が存在したことである。

破壊力も快感を覚えるほど徹底したものだった。徹底的に容赦なく微塵に粉砕した。

きっとこの兵士は、底なしの暗さをたたえた目の若者にちがいない……。

ワイズマンは満足だった。電子装置に機体のナンバーから身許(みもと)をさぐらせた。装置はすぐさま、ワイズマンの思念に反応して記号をおくった。

「キリコ・キュービィー……」

そうか、それが暗い目の若い兵士の名前か……。

思念は、その名前を記憶すると、何時の日にか、この兵士と巡り会わねばならないと感じていた。

そしてワイズマンは、久方ぶりに充実している自分を認識していた——。

とフィアナである。しかし、キリコに恋するココナ、フィアナに求愛の情を示すイプシロンは物語に活力を与えてくれた。

MMercenary

傭兵は金で傭われればどこででも、どんな作戦でも戦う。アッセンブルEX―10もまたそんな兵の集団だった。中でも、シャッコたちクエント人は傭兵で生計を立てる民族として有名。

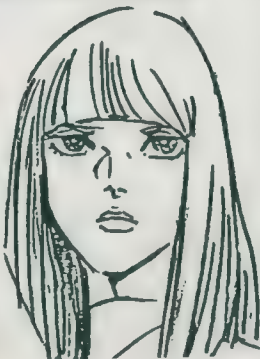
NNightmare

悪夢―それは戦艦Xの中でおきた。フィアナとのふたりだけのとき、レッド・ショルダーのマーチがキリコを打ちのめす。キリコの心の扉は閉じ、心の傷は開いてしまうのだった。

PPS(Perfect Soldier)

戦いのために人為的に作り出された完全なる兵士。それは人間の潜在能力を極限まで引き出すための遺伝的処理と脳の特殊なレクチャーにより作り出され、成人した姿で誕生する。反面、その特性を維持し生存するためにはヂヂリウムが不可欠という欠点を有する。現時点ではプロトワン(ファンタム・レディ)と、ゼロワンの2体が存在するのみである。

PPhantom lady

PSの第1号。レクチャーされる前にキリコを見たため、PSらしからぬ情緒反応を示すようになる。フィアナというのはキリコが呼んだ名。彼女はキリコによって兵士からひとりの女性(フィアナ)になったのだ。フィアナがフィアナであること、それは人を愛することなのだから。

QQuento

ル・シャッコたちの母星であると共に、ギルガメスとバララントを陰から支配した謎の意志、ワイズマンのいるところ。

RRed-Shoulder

メルキア戦略装甲騎兵団特殊任務班X―1の異名。ATの右肩を鮮血の色に塗り分けていたことが由来。非情な任務も冷徹に遂行するものたちで、その血ぬられた戦歴は吸血部隊と恐れられた。

RRido

メルキア軍のPS研究所のある小惑星。すべての物語のはじまりである。

SSunsa

戦艦Xが不時着した惑星。ゾフィとの出会いと、ヂヂリウムの切れたフィアナはキリコの心の傷をいやした。イプシロンとの決戦も本星上であった。

TTechnology

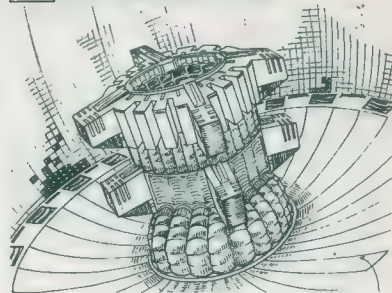
パーフェクト・ソルジャーを作るために投入された、最先端のあらゆる分野の技術のこと。しかし、実際に完成した2体の行動を見れば、完全な兵士としてレクチャーすることがいかにむずかしいか想像できる。

UUdo

リドの研究所襲撃作戦後、PSを追うメルキア軍情報部の追跡を逃れて、キリコがまぎれこんだ街。終戦であぶれた兵士たちの吹き溜りのようなところで、酸の雨と暴力の無法の町。闇商人のゴウト、バニラ、ココナたちと出会った街でもある。

VVanilla

ウドの街で闇商人として生きていた彼は、同業者のゴウトのところへ来てキリコと出会う。やがてキリコを気に入ってココナ、ゴウトたちと組んで面倒を見て行くことになる。ココナに一方的に惚れていたが、ワイズマンとの決戦後その思いをとげることができた。

WWiseman

古代クエント人から発生した異能者たちが、自分たちの肉体がほろびるさいに意識を残すために作った、壮大な人工知能体。異能者各人の意識を集合記憶し、ひとつの人格を持っている。ギルガメスとバララントを分割統治し、新たな人類から生まれた異能者キリコに後継ぎを望むが、その夢をはたすことはついになかった。神は死に、人は生きたのだ。

XXperiment

実験――それはPSを作ること、人間の戦闘能力を高めること。しかしそれは自らの後継者を作るため、ワイズマンがしくんだ壮大な計画のひとつだったのかも知れない。

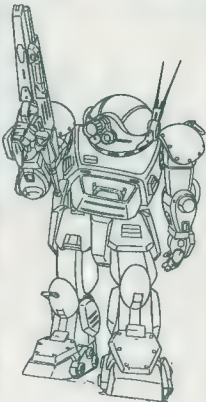
ZZizirium

大戦中にコンピューター用の回路素子として使用された謎の金属。PSは、その生理機能を維持するためには定期的にヂヂリウムのシャワーをあびなければならない。惑星サンサ上でフィアナはシャワーをあびられず危機におちいった。

ENCYCROPEDIA of CHIRICO

A Armored Trooper

小型の単座2足歩行兵器で、強化服と似ているがまったく異ったコンセプトで開発されている。接近戦、白兵戦で絶大な威力を発揮する。

歩行兵器なので長距離移動にはトレーラー、ヘリコプターが使用される。コックピットは頭部から胸部にかけての位置にあり、外部モニターは頭部正面のターレットレンズで行う。キリコはメルキア軍の主力のスコープドッグ及びそのシリーズを好んで使用している。

B Battling

ウドの街で行われていた、ATを使用する賭け試合のこと。ボローたちはキリコをワナにはめて合法的に抹殺しようとした。

C CHIRICO

本編の主人公。ギルガメス暦2326年7月7日、メルキアに生まれる。少年のころメルキア軍に志願し、ATパイロットとなる。曹長に昇進後、メルキア戦略装甲騎兵団特殊任務班X－1に配属される。パルミス、オロム、ミヨイテの戦役で生き抜くが、非情な戦いの中でしだいに戦いの中にしか安息を見いだせぬ人格となる。終戦直前の謎の作戦行動中、リドの研究所で素体との運命的な出会いをする。

C Cocona

ウドの街の浮浪娘。ひとりでたくましく生きていて、ゴウトのところに仕事をもらいによく遊びに来ている。そんなときにキリコと出会いほのかな恋心を抱くようになる。しかし、キリコの目がフィアナに向いていると知り痛手をうけるが、後にバニラと結ばれる。

E Epsiron(Zero One)

ファンタム・レディと前後して研究所で開発された男性版のパーフェクト・ソルジャー。秘密結社の切り札として、神聖クメン王国でアッセンブルＥＸ－10の傭兵から恐れられる。ファンタム・レディに求愛の情とも思える情緒反応を示すなど、完成度には疑問点もある。惑星サンサで、潜在能力に目ざめたキリコとの対決に破れ、死亡する。

G God

神。それは人を制する者。人智のおよばぬところでなにかの力を発揮するものなのだろうか。ワイズマンは自らを神と呼んだ。

G Gouto

ウドの街で闇商人をしながらバトリングに手を染めていて、キリコと出会う。キリコの素性を知るにつれ後見人となる。最後までキリコにつき合った、気のいいとっつあん。

H Holy Kumen Emqire

キリコの所属するアッセンブルＥＸ－10と敵対する神聖王国。国王を名のるカンジェルマンの本意は、クメンの近代化のために、古きものすべてを道づれに自らをも一掃することであった。神聖クメン王国はもくろみ通り炎の中に消え、彼も親友の手にかかり死亡する。

J J.P.Rocchina

メルキア軍情報部大尉として登場し、ウドの街とクメン王国では、ファンタム・レディを奪取するために彼女と関係のあるキリコを監視、追跡した。が、宇宙にフィアナとともに飛び立ち、戦艦Ｘで漂流しているキリコを追ってふたたび登場したとき彼の身分は、敵、ギルガメス軍の指揮官だった。そしてその実体はワイズマンの下僕という謎の人物。

L Lover

恋人たち、それはいわずもがなキリコ

キリコはどこへ行くんだろう？ 自分のことみたいに気になります。

郷田ほづみ

AM　キリコは寡黙なキャラクターですから、感情表現の面で苦労があったと思いますが。

郷田　声のトーンなどより、むしろそのときの心理状態。そういったことに気をつけてましたね。感情移入してやりました。心理の推移という点では1クール目がやりやすく、男女関係のおもしろさという点で惑星サンサの話もよかったと思います。

AM　いちばん気に入ってる話は何話ですか。

郷田　ええ、最終回ですね。アフレコのときは、ああ終わったんだ、くらいでしたが、TV放映のときはもう客観的になんか見れませんでした。キリコと自分がだぶっちゃって、ラストなどはあのままどこへ行くんだろう……とボーッとしちゃって、もうそれだけでした。カプセルはどこかに不時着なんかせず、永遠に宇宙をただよっていてほしいですね。

AM　クライマックスに向かうときのキリコの変身。あのインパクトなどは。

郷田　味方を騙す。ひょっとしてキリコは、ものすごい葛藤をしていて、地の部分がバーッと出ているんじゃないか？　と思いながらやってましたね。だからもしまちがってフィアナが死んでしまったらキリコの選択はどうなったかな、とかね。とにかく〝悪役〟としてのキリコはたのしんでやってました。

AM　登場したキャラの中で郷田さんのお気に入りは。

郷田　（当然）キリコですよ。ああなっては困る、という部分もないことはないですが、いちばん憧れます。3人組は肉親に近いような感情でしたね。女性の心理としては、ココナのほうが理解できるんです。フィアナは現実感がなくてね。まあ理想の女性と、結婚したい女性は別、というでしょう。イプシロンは、あまりすきじゃない。感情の露出のさせ方が女っぽくて、なんとなく情ないんですよ。しかも面倒を見てるのがオカマの双子である（爆笑）という。演出としてはよかったと思いますけど。

AM　メカもののアニメとしてはどう思いますか。

郷田　戦闘シーンの作画にリアリティがあるし、キリコもATをどんどん乗り換える――もちろんスコープドッグシリーズを好んで乗ってますけど――武器としては使っていてもメカとして使っていない。現実的ですよね。もっとも、ひとつのATで通したほうが（オモチャが）売れたかもしれませんけど（笑）。

AM　ファンの反響はどうでしたか。

郷田　はじめはキリコがすきで手紙をくれていたんですけど、「ウソップランド」でコメディーをやってるのを見て、カルチャーショックだと……。まア、180度反対のイメージですからね（笑）。で、最近では、キリコのぼくもコメディーやってるぼくもすきだと書いてくれる。そういう意味で、キリコがGP受賞したのはすごくうれしい。ぼくもがんばって今度は声優部門でGPをねらいたいですね。

（4月4日、東京・六本木にて）

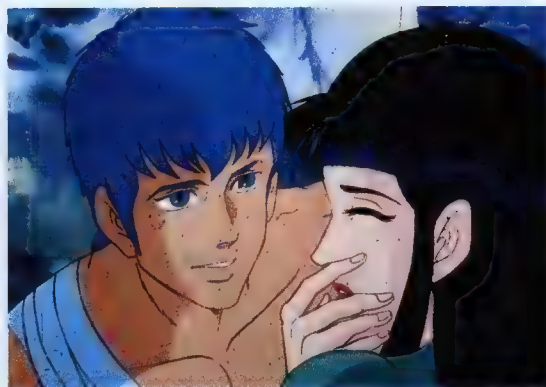
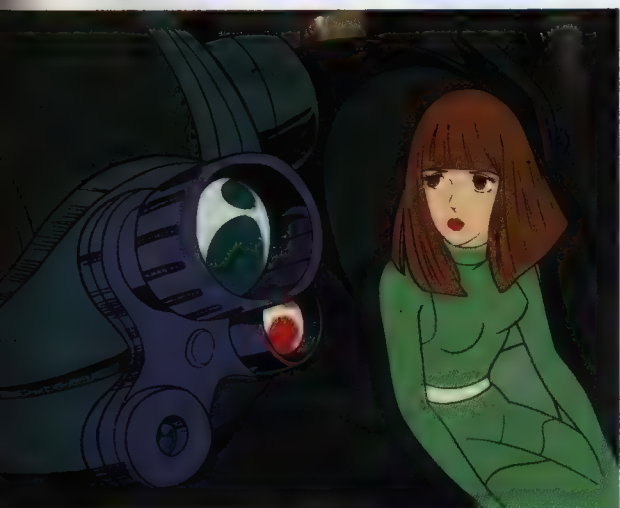
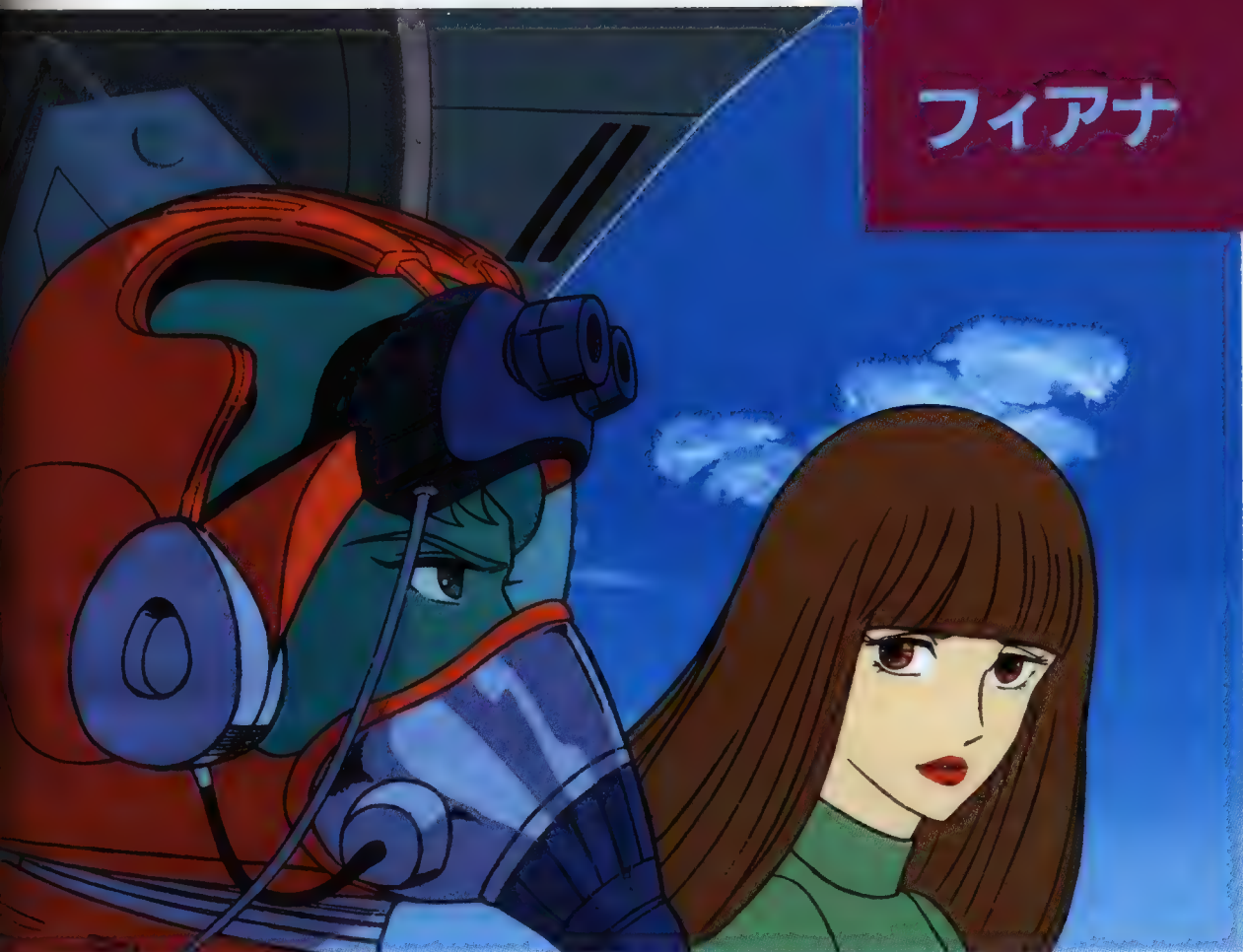
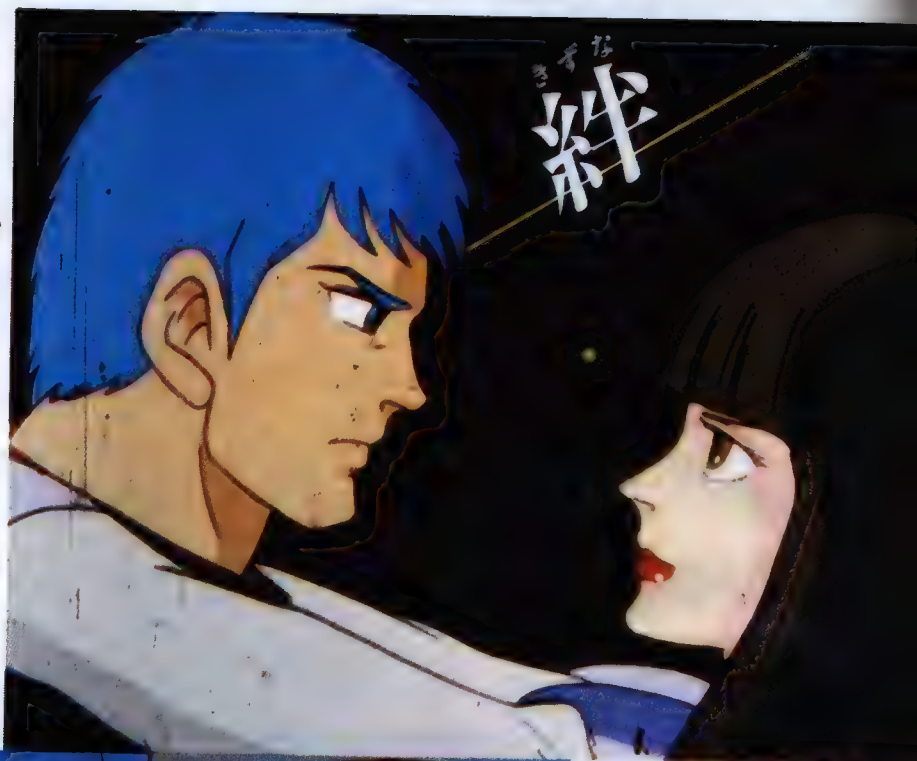
影／柏木久育

CHIRICO
graffiti

キリコ

キリコ・キュービィー。アストラギウス銀河の動乱の中に生まれた男。その戦いの中で過去をぬすまれ、見知らぬ街―国―宇宙―惑星をさまよう。キリコの体にしみついた硝煙の臭いは危険な臭い。地獄を見るほどに彼の心は騒ぐのだ。降り注ぐ火球、舞い降りる鉄騎兵、圧倒的なパワーの蹂躙。運命、絆、縁。人間的な、あまりに人間的な響きはそぐわない。炎に追われ、閃光に導かれおまえの行く果ては何処!?

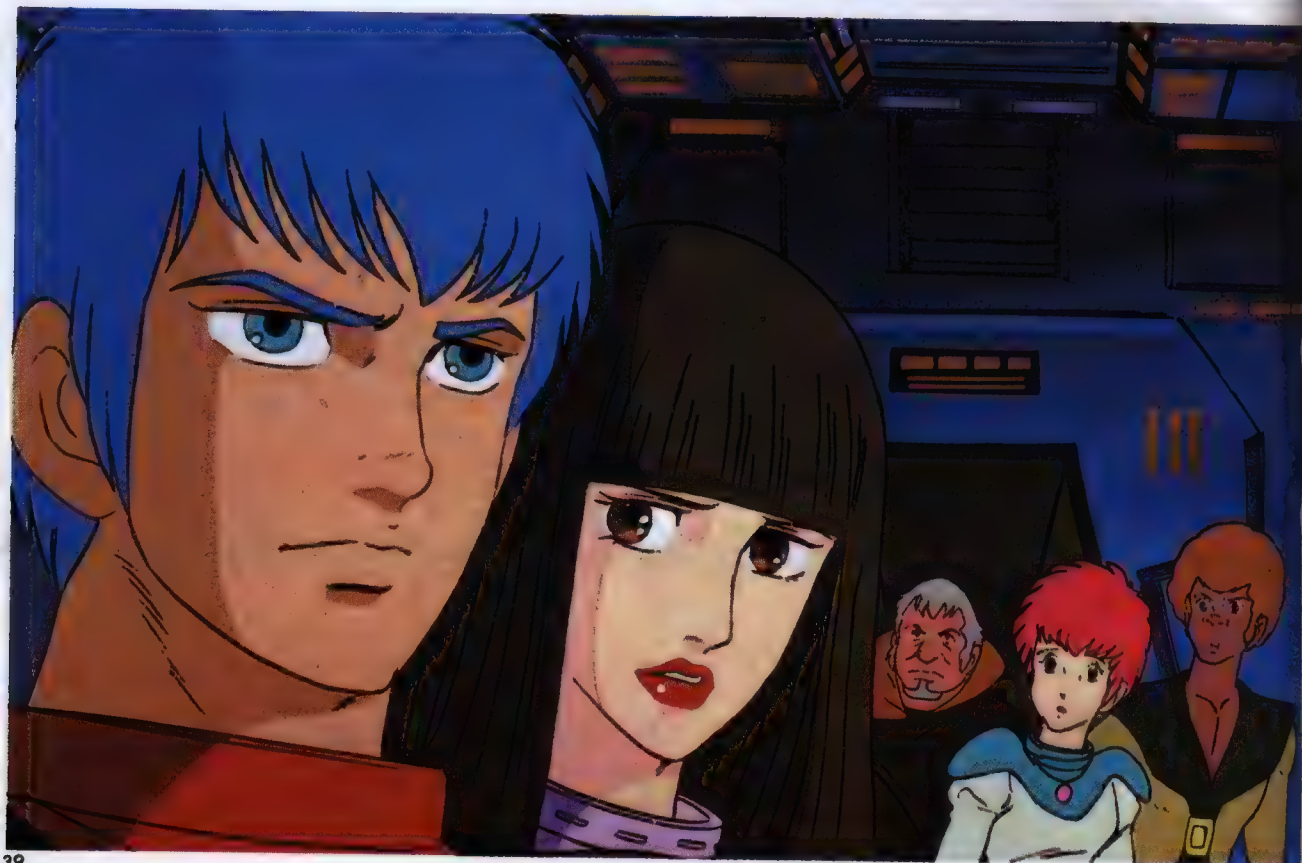
フィアナ

絆（きずな）

惑星リドのPS研究所での運命的な出会いがふたりの仲を決定づけたのだろうか。ウドの街での再会—無意識のうちに呼んだ名「フィアナ」。再会まもなくウドの街はPS奪回作戦の炎の中に沈む。クメンに渡ったキリコの前にふたたび現れたフィアナ。キリコはフィアナを追い求め、フィアナもまたキリコを受け入れる。人為的に作られたPS、ファンタムレディはしだいに人間の女として目醒めていったのだ。そしてキリコも……。不思議な絆に結ばれたふたりは戦艦X—惑星サンサとたがいに助け合いながら謎の地クエントへと進む。

イプシロン

もうひとりの俺…

仲　間

仲間か……何やら照れくさい。だが久し振りに俺の胸は暖かいもので満たされていた……。

ワイズマン

古代クエント文明が頂点に達したころ、クエント人から派生した異能者は、その能力を発揮して星間をも支配するに致る。しかし彼らにも唯一の弱点があった。子孫を残せなかったのである。彼らは代って自分たちの意識の集合体を創造した。それがワイズマンなのだ。

そして数千年の後、新たな人類から同じ素質を持つ人間がふたたび発生しようとしていた。生まれながらのPS、異能者、後を継ぐにたる者。その者の名こそキリコ——おまえなのだ。

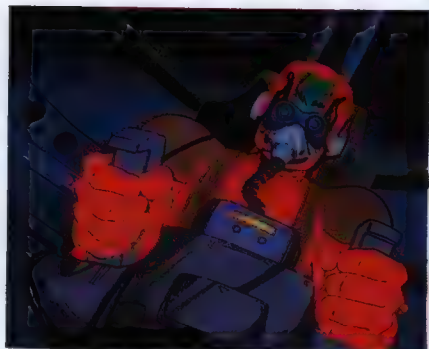
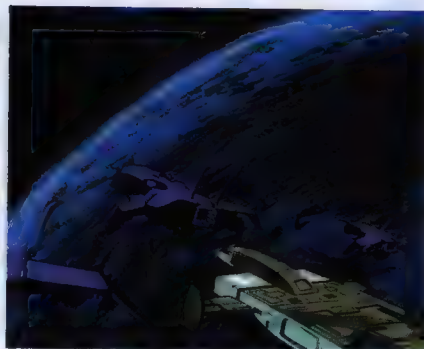
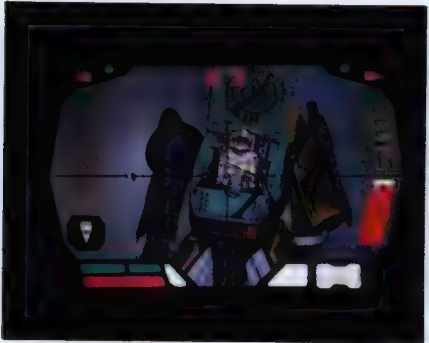
VOTOMS
The last story
「流　星」
フィルム・ストーリー

神とはなんなのだ、人…

だ　友を捨て、フィアナ…

までキリコ、おまえは神…

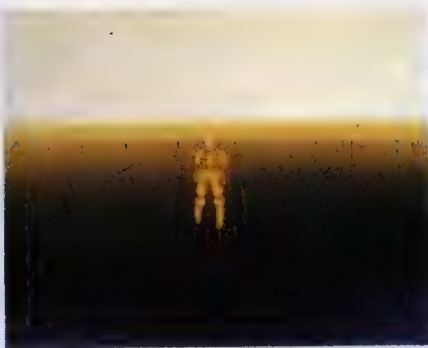
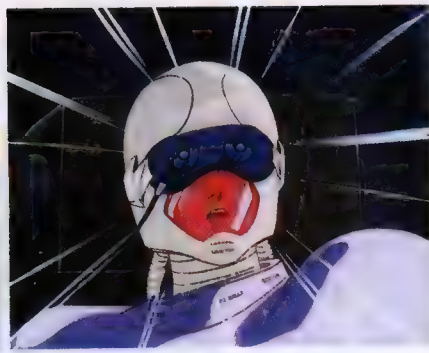
のか!?　物語はクエント…

いよいよ終幕を迎える。

3 鬼気迫るものがある

1 衛星軌道上に集結するバララント艦隊

4 フィアナは必死でキリコを説得しようとするが

2 ギルガメスのＡＴを倒して進むキリコには

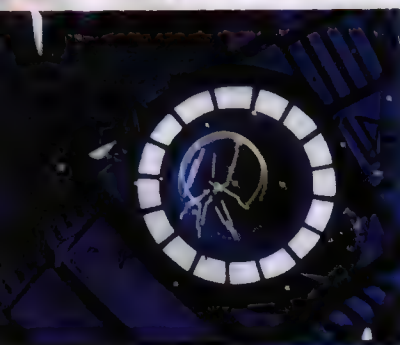
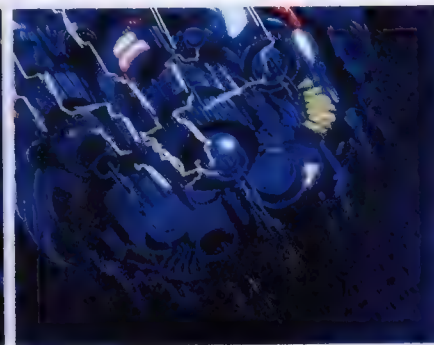
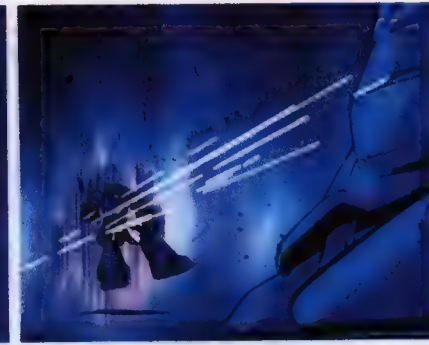
解説―まだ見ていない人のために

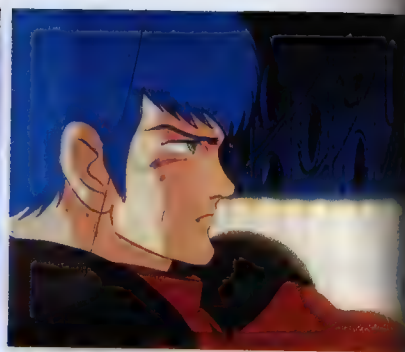
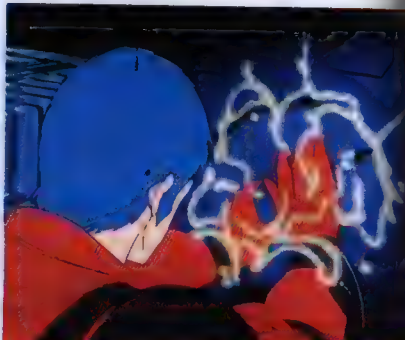
小惑星リドーウドの街―クメン王国―戦艦X―そしてキリコはいま終着地クエントにいた。ここにキリコの謎を解く鍵があるというのだ。傭兵部隊の仲間ル・シャッコの協力を得、秘密結社の科学者アロンとグランからのがれてキリコは古代超文明の遺産をかくした禁断の地へと向かう。たびたび窮地に立つキリコだが、その度にクエント文明の謎の力に助けられ、ついに星の中心部へ入る。フィアナとロッチナとの再会、結社の幹部キリィの追撃。と、そのときワイズマンのコンタクトをキリコは受ける。ワイズマンは後継者としてキリコを指名し、おまえは生まれながらのPS、すなわち異能者で正統な後継ぎだというのだ。ワイズマンの意志を受諾したキリコは変わった。神を継ごうというのだ。愕然とするフィアナたち。いよいよ大詰めである。戦場にしか生きられない自分から人間としての意識に目醒めたキリコと、人間のすべての業を持つともいえるワイズマン。不可解な行動をとるキリコの本意はどこにあるのか!?

キリコに記憶を伝えようとするワイズマン

9 ワイズマンの意志により運ばれるキリコ！

5 キリコの殺気にハッとするフィアナ

6 キリコは非情にもトリガーをひく

7 フィアナにふりかかる弾片

1 意外！　その中枢部をキリコは発砲し、破壊しようとする

3 伝達装置は連射されてしだいに砕け散る

12 驚き、いかりにふるえるワイズマンだが

8 ＡＴはぶちぬかれながら後退し、消えていく

⑱「あなたがわざと外して撃ったとき、それに気づいたわ……」

⑭メモリーをつぎつぎに外すキリコ

⑮ワイズマンは基板をスパークして気絶させる

⑯目をさましたキリコの眼前にはロッチナが！

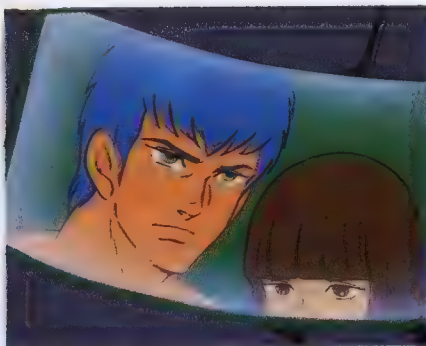
⑲必死でロックを回し基板を抜いてまわる

21 自爆装置のタイマーが時をきざむ

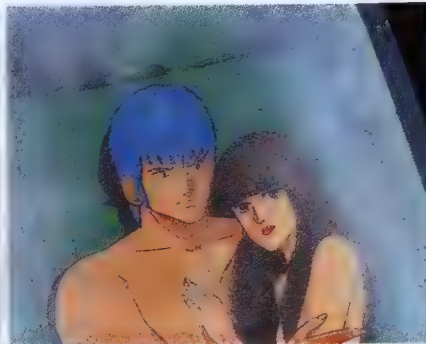
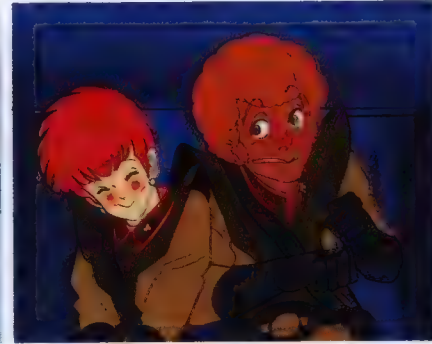
⑰「ワイズマンを騙すにはああするしかなかった

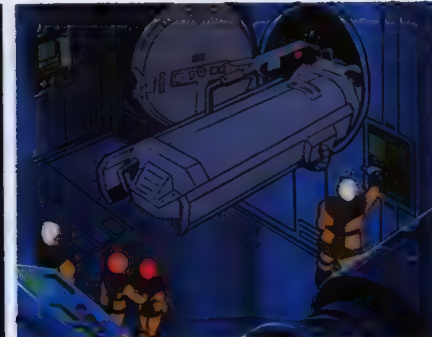
⑳「せっかくの権利を捨てて」絶叫するロッチナ

22 カウントダウン中の艦隊の目前でふっとぶ惑星

28「ココナ……ゴート。バニラ。シャッコ」

26「あと20分で眠りに入る」

23ふたたび起きた戦いからのがれた仲間たち……

29「おまえたちに会えてよかった……」

27「それまで宇宙を見ていたいわ……開けて……」

24カプセルの前でふたりは照れてしまう

30「そして……フィアナ……」

25旅立つキリコたちのカプセルを見守る。お別れだ

「流星」製作スタッフ

脚本／吉川惣司　原画／加瀬政広・吉田徹・貴志夫美子・糸島雅彦　動画／沖浦啓之・三村恵子・野中幸・小松和枝・井上哲・逢坂浩司・アニメ・アール・オールプロダクション　動画チェック／清島孝一郎　色指定／野崎絹代　仕上／ジャスト・オールプロダクション　特殊効果／千場豊　背景／槙プロダクション・南郷洋一・西村康浩　撮影／スタジオウッド　編集／鶴渕映画　効果／松田昭彦　制作進行／葛見孝博　設定進行／井上幸一　文芸／並木敏　制作デスク／山本之文　絵コンテ／滝沢敏文　作監／谷口守泰　演出／加瀬充子　監督／高橋良輔

第6回アニメGPサブタイトル部門第1位

「愛は流れる」

フィルム・ストーリー

アニメ・ファンの投票による第6回アニメＧＰサブタイトル部門第1位に選出された「愛は流れる」より、未沙と輝の再会を描いた感動のクライマックスを誌上レビュー！

[1]未沙の声に驚く輝。「大尉……早瀬大尉!!」

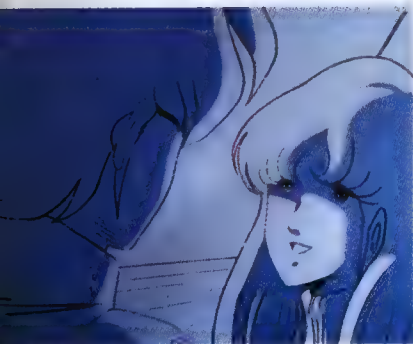
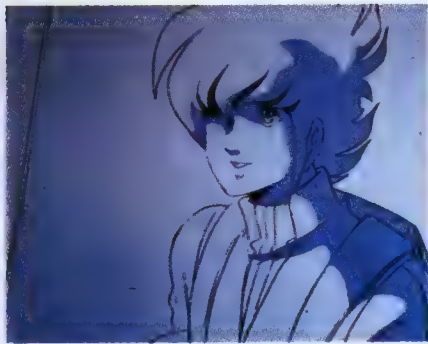
[2]「その声、まさか……まさか、一条くん!?」

[3]危険をかえりみず、未沙のもとへと急ぐ輝

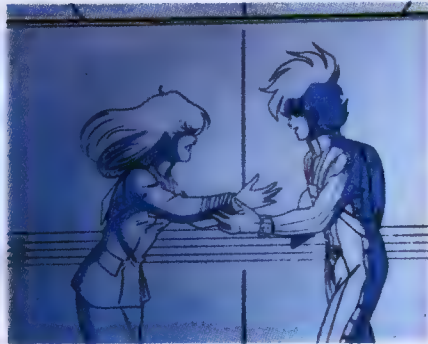
[4]「一条くん、あなたって……あなたって……」

解説――まだ見ていない人のために

「愛は流れる」は、「超時空要塞マクロス」の第27話（制作ナンバー25）として放映されたエピソードで、本来は最終回として考えられていただけに、その密度は高いものになっている。黒河影次（河森正治氏のペンネーム）の絵コンテは、ミンメイの歌に合わせてシーンが作り出され、サブ・タイトルもミンメイの歌のタイトルが使用されている。また、美樹本晴彦氏最後のキャラ作監でもあり、ミンメイや未沙をはじめとするキャラクターの作画がすばらしい。

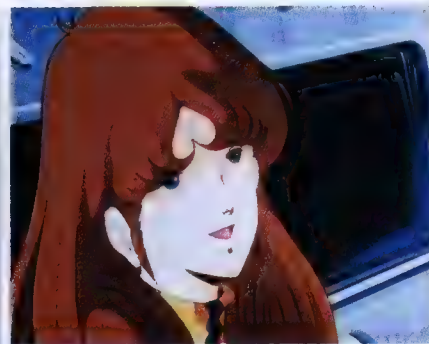
〈物語〉ボドルザー艦隊との決戦がついに開始され、輝は出撃を前にミンメイに愛を告白する、突然の告白にミンメイは深いショックを受けるのだった。マクロスとブリタイの合同艦隊は、ミンメイの歌う「私の彼はパイロット」を合図に一斉に攻撃を開始した。戦闘中、輝はミサイルの猛攻によって気を失ない、大気圏近くまで押し流され、そのまま圏内に突入してしまう。焦土と化した地表を飛行中、輝は通信を送る未沙の声を聞いた……。

11 喜びのふたり

9 駆けよる輝

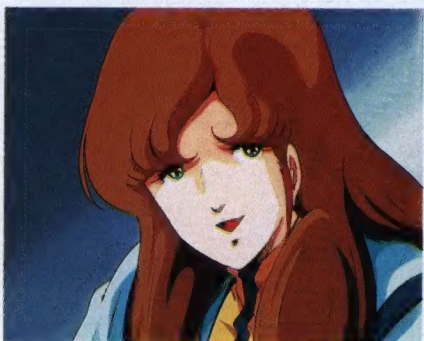
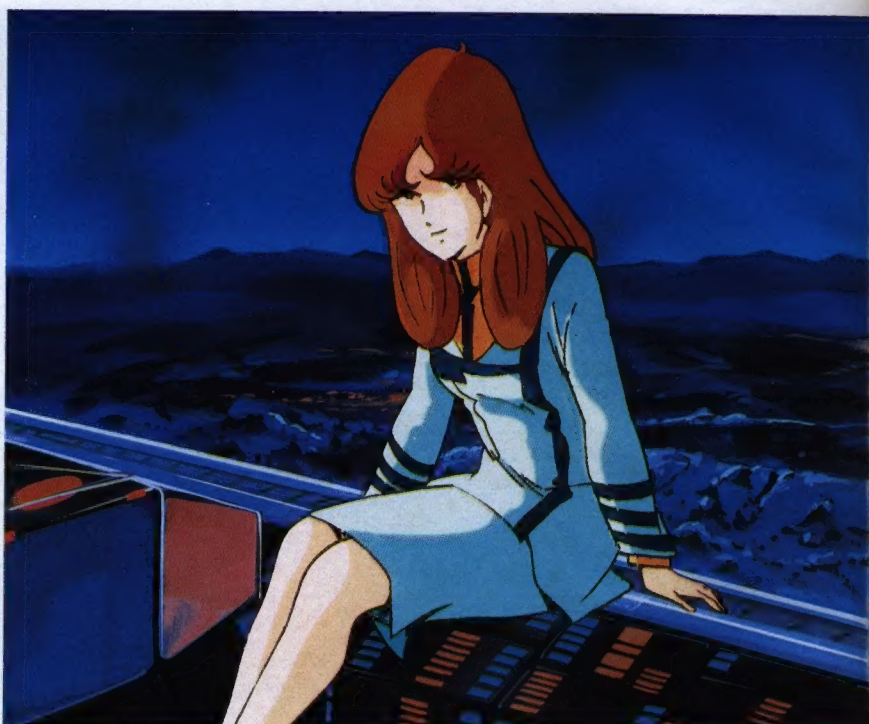
5 グランド・キャノンの中に降下するガウォーク

12 輝のヘルメットを付け、体を輝にあずける未沙

10 倒れこむように飛びこんでいく未沙

6 未沙を見つける輝。「大尉!!」

7 ミンメイの歌が流れる中、輝と再会する未沙

13 無事脱出、ヘルメットを脱いで、髪をなおす未沙

8 「……一条くん……」 駆けよる未沙

19しれないわね？」「それでもいいんじゃない」

20「ひとりぼっちじゃないんだから」「一条くん…」

14「ほんとういうとね、今度も、また、あなたが来てくれるんじゃないかって、思ってたのよ」

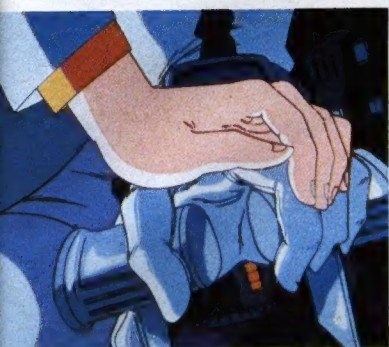
21そのとき、かすかに歌声が聞えてくる

17「終わったようね……みんな無事かしら……」

15「大尉……」

22「この声は…」「ミンメイさん！」「あれだ！」

18「地球で生き残ったのは私たちふたりだけかも

16いたずらっぽく笑う未沙

輝の手の上にそっと、やさしく手をそえる未沙

27朝やけの中に雄姿を見せるマクロス

23降下してくるマクロスの雄姿

ふたりの手がそえられたスロットル・レバーがゆっくりと押され、輝の愛機バルキリーは一路——

24「マクロス!!」マクロスの無事を喜ぶふたり

25昇る朝日の中に降下するマクロス

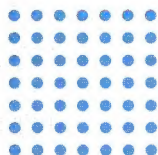
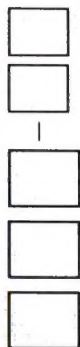
「愛は流れる」製作スタッフ

脚本／松崎健一　絵コンテ／黒河影次　キャラ作監／美樹本晴彦　メカ作監／板野一郎　原画／栴裕・庵野秀明・青井清年・飯田史雄・AIC・マーメイド　動画／野田昭子・八谷賢一・岩下啓蔵・中村智津子・荒木英樹　背景／佐藤広明・山元健生・沢井裕滋・長谷川正史　仕上／北瓜英子・星幸子・安斉弘美・尾形薫　撮影／橋本和典・小西・廣　美術担当／多田喜久子　色指定／由井あつ子　セル検査／斉藤明美・高田香代・杉浦充　制作進行／沖本信幸　監修／河森正治　演出／石黒昇・笠原達也

30マクロスへと向かった。愛しあうふたりを乗せて

26うれしさに肩をよせあうふたり

POST CARD

Animage

STAFF

編集協力／芹沢遼一
徳木吉春
レイアウト／真野薫
テングラフィス
©日本サンライズ
毎日放送
ビックウエスト

昭和59年６月10日発行（毎月１回10日発行）第７巻第６号　昭和57年６月15日国鉄首都特別扱承認雑誌第6262号　昭和53年12月21日第三種郵便物認可

第6回アニメGPキャラクター部門第1位

JOINT BOOK

MISA